

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第101号

特集 遺跡でたどる京都の歴史(1) 旧石器時代の京都 ----- 中川 和哉 --	1
共同研究 玉類製作技法の検討 市田斉当坊遺跡出土の管玉孔内に遺存する 石針を巡って ----- 石井 清司・岩松 保・田代 弘 --	13
平成18年度発掘調査略報 -----	21
1．城谷口古墳群	
2．野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次	
3．長岡京跡右京第870次・下海印寺遺跡	
4．美濃山遺跡	
府内遺跡紹介 107．遠處遺跡 -----	29
長岡京跡調査だより・97 -----	31
「第105回埋蔵文化財セミナー」 -----	33
「第22回小さな展覧会」 -----	39
センターの動向 -----	40

2006年11月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

## 旧石器時代の京都

中川 和哉

はじめに

『京都府埋蔵文化財情報』では、今号から「特集」として「遺跡でたどる京都の歴史」を連載することになった。第1回目の本号では「旧石器時代の京都」と題し、府内の旧石器時代の遺跡について概観することとしたい。

京都府は、旧石器時代遺跡の発掘事例が非常に少なくその内容も乏しいものと考えられている。これまでの京都府内での旧石器時代や縄文時代草創期の遺物の発見や発掘調査について問題点を整理していきたい。なお、これまで縦長剥片や細石刃の発見をもって旧石器時代の遺物とするものが多いが、こうした石片は偶然によってできる可能性があるため、明確な道具や石刃核・細石刃核の存在が確認できない限り遺跡として除外した。

### 1. 研究史

1949年の相澤忠洋氏の群馬県岩宿遺跡発見によって、日本ではじめて旧石器時代遺跡の存在が明らかになった。岩宿遺跡発見と前後して、西日本の瀬戸内海島嶼部では鎌木義昌、高橋護両氏を中心に鷲羽山遺跡周辺の分布調査が行われ、1954年には香川県井島遺跡の発掘調査が実施された。その後、同地域で相次いでナイフ形石器文化期の遺跡が調査され、編年試案が示されるに至った。

近畿地方では、1916年に喜田貞吉氏が福原潜次郎氏の大阪府国府遺跡採集石器中の「大型粗製の石器」に注目したことが端緒となる。1957・1958年に国府遺跡が、縄文時代の人骨の再検討と旧石器時代遺物の存否を確かめることを目的に発掘調査された。

1970年前後、学生運動の高まりとともに、高度成長による国土の開発により、破壊の危機にさらされた遺跡の保存運動とあいまって、遺跡を潰さずに分布調査によって明らかにしていく活動が各地で行われていた。多くは群集墳の分布調査やそれをもとにした測量調査が、考古学研究会などの学生達の手によって実施されていた。こうした活動の1つに同志社大学の学生を中心とする「旧石器文化談話会」の二上山周辺の分布調査があり、1974年の『ふたがみ』の刊行によって学生達による成果がまとめられた。

こうした中、京都府内ではじめての旧石器時代の石器が発見された。当時は帰属時期のはっきりしなかった有舌尖頭器の紹介が、1968年、三上貞二・袖岡正清両氏により『古代学』紙上に掲



ットとして作られたのが「京都府乙訓地方の石器 資料編」である。この冊子は都出比呂志・四手井晴子両氏の編集により作られ、未発表の多くの石器が集められている。発見者自身の文章や遺跡保護の文章の寄稿などもあり当時の運動のあり方がよくわかる本である。

「第1日曜日会」のメンバーが発見した大枝遺跡<sup>おおえ</sup>は、ニュータウン建設によって破壊されることになったが、それが旧石器時代の遺跡を目的とした京都府内でははじめての発掘調査となった。発掘調査の結果、縄文時代早期の押型紋土器などとともにサヌカイト製の瀬戸内技法関連遺物が採取されているが、本来の包含層を確認することはできなかった。

京都府北部地域では1972年に坪倉利正・釋龍雄氏によってはじめて有舌尖頭器の紹介がなされた。1972年には芦田均、中川淳美両氏によって武者ヶ谷<sup>むしやがたに</sup>2号墳の発掘調査が実施されたが、その際、縄文時代草創期の土器が出土した。京都府内では唯一の草創期の土器出土事例となった。旧石器時代の遺物の発見もまた1972年で、綾部市<sup>いづくたの</sup>久田野遺跡でチャート製のナイフ形石器が採集された。

京都府に隣接する大阪府の北摂地域では、1970年前半に高槻市郡家今城遺跡・津乃江南遺跡などの原位置を保っていたと考えられるまとまった石器が発掘調査によって発見されはじめた。京都府域では大阪・京都のベッドタウンとして乙訓地域の宅地開発に拍車がかかった時期である。乙訓地域はほぼその全域が長岡京域に含まれるため、開発に伴う発掘調査が急増した。その結果、長岡京市・向日市では旧石器時代の遺物の発見事例が増加していったが、原位置を保っている遺物の出土は見られなかった。

1997年の南栗ヶ塚遺跡<sup>みなみくりがつか</sup>の発掘調査において、京都府内ではじめて原位置を保った石器群が発掘調査された。出土点数は少ないが、ナイフ形石器と剝片、石核が出土し接合資料も得ることができた。同時に火山灰分析も行われた。2004年の神足遺跡<sup>こうたり</sup>(岩崎2005)ではアカホヤ火山灰と始良火山灰降灰層の間から、サヌカイトを主体とする石器群が発見されている。乙訓地域で旧石器の発見が相次ぐ中、それらは特定の遺跡で多く発見されることがわかってきている。今里遺跡<sup>いまざと</sup>、南栗ヶ塚遺跡、神足遺跡など石器が多く検出される拠点的な地点では、近い将来こうした原位置を保った石器群が発見される可能性が高い。

## 2. 遺跡における降下火山灰

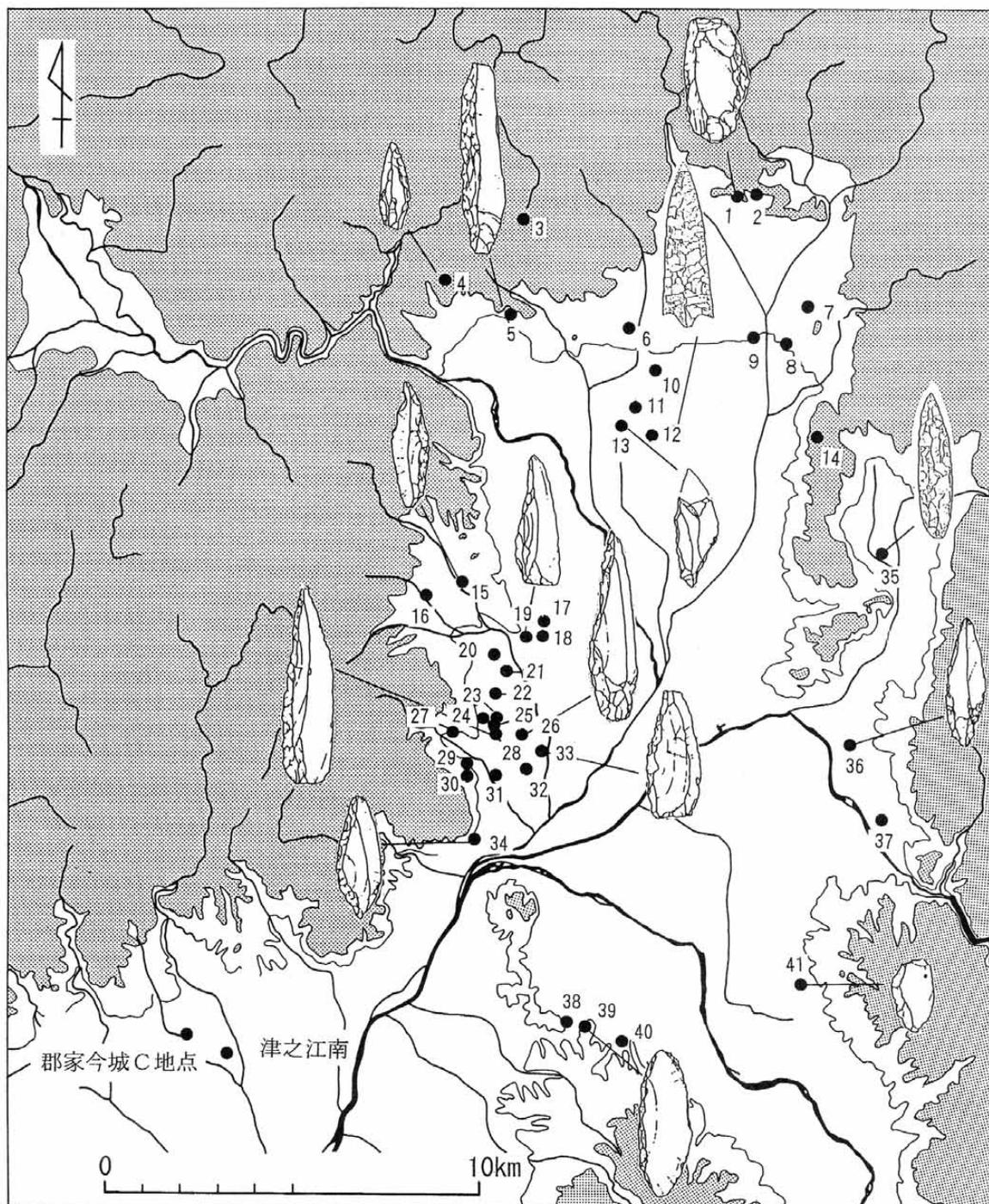
旧石器の編年には、広域火山灰と呼ばれる火山灰層を用いることが有効である。ここでは遺跡内から発見された火山灰層について見ていきたい。

京都における火山灰研究は平安神宮周辺の火山灰堆積層が有名である。1989年(内田1994)の調査では、始良火山灰層直上の泥炭層から大型偶蹄類の足跡化石が検出された。これらの足跡は最終氷期のものとされている。1998年には当調査研究センターの発掘調査(有井1999)によって大山系の火山灰と始良火山灰をそれぞれ単層で検出することができた。その間には1.4mの堆積物があり、泥炭層も複数枚検出されたが、遺物は共伴しなかった。

向日市では、1986年の殿長遺跡<sup>でんちやう</sup>(山中ほか1987)の調査で、始良火山灰層直上の泥炭層からウ

シ類と考えられる足跡化石が発見されている。この足跡も最終氷期のものと考えられている。

亀岡盆地では、鹿谷遺跡(野島・河野1993)の発掘調査において、泥炭層とともに始良火山灰層が検出されている。盆地南部の案察使遺跡(中川ほか2005)では後背湿地と考えられる場所から、



第2図 京都盆地周辺の旧石器・縄文時代草創期遺跡分布図

1. ケシ山 2. 上賀茂本山 3. 沢池 4. 菖蒲谷 5. 広沢池 6. 北野 7. 北白川追分町縄文  
 8. 吉田橋町 9. 公家町 10. 朱雀第6小学校内 11. 西ノ京桑原町 12. 朱雀第7小学校内 13. 西  
 院三蔵町 14. 清閑寺霊山町 15. 大枝 16. 大原野 17. 殿長 18. 岸ノ下 19. 北山 20. 頭本  
 21. 今里 22. 舞塚 23. 小池下 24. 東代 25. 開田城ノ内 26. 開田 27. 奥海印寺 28. 十三  
 29. 伊賀寺 30. 脇山 31. 友岡 32. 南栗ヶ塚 33. 神足 34. 山崎 35. 中臣 36. 五ヶ庄二子塚  
 37. 西隼上り 38. 西ノ口 39. 金右衛門垣内 40. 美濃山荒坂

アカホヤ火山灰層とともに、層厚約10cmの隠岐鬱稜火山灰(約1.1万年前)の火山灰層が検出され、その下層からネガティブな押型紋土器が出土している。丹波地域の標準的な段丘上の土層は、黒ボク層 漸移層 黄褐色粘土層 礫層である。多くの場合耕作などによって黒ボク層の上半部あるいはすべてが欠如している。縄文土器はすべて黒ボク層から出土する。水成堆積を除きアカホヤ火山灰は黒ボク層中から検出されるが、単層で発見されることはない。黒ボク層下部の粘土層から遺物が出土した事例は、蒲生遺跡のみである。京都市(旧京北町)東山遺跡の火山灰分析では始良火山灰は粘土層上部において火山ガラスの集中が見られた(中川2000)。同じ山塊に属す、兵庫丹波地域の七日市遺跡や板井遺跡などでは、始良火山灰が単層で発見されている。七日市遺跡は埋没段丘上の遺跡で黒ボク層とシルト層の間に純層の始良火山灰層が挟まれる。こうした良好な遺跡は京都側では発見されてないが、低湿地にある板井遺跡タイプの遺跡は、亀岡盆地周辺で発見される可能性が高い。こうしたことは、弥生時代や古墳時代の土器の胎土分析を行った事例(中川・檀原ほか2000)において通常の再堆積による粘土を用いたのではなく、高い比率でアカホヤや始良火山灰のガラスが検出されることがあり、現在知られているより多くの火山灰を含む粘土層が広がっていることを傍証している。

丹後地域では遺跡と関連して火山灰層が発見されたことはほとんどないが、2層の火山灰層が見える路頭や古砂丘中に火山灰層が認められる事例があると聞く。

### 3. 石材の利用

近畿地方では、二上山産と考えられるサヌカイトがナイフ形石器の主要な石材として用いられる。これまで発見されている石器の多くはサヌカイト製であり、特に瀬戸内技法関連の遺物はほとんどすべてがサヌカイト製である。この現象は丹波山塊中に位置する蒲生遺跡でも認められ、採集された国府型ナイフ形石器はサヌカイト製である。一方、旧石器時代に用いられた石材のうち京都府内で産出するものに、チャートがある。チャートは丹波山塊地域にあたる丹波帯から露頭や転石から入手することが可能である。また丹波帯より南部の地域においても、丹波山塊を源とする河川堆積物や大阪層群中から石を獲得することができる。

国府型ナイフ形石器以外の2側辺加工のナイフ形石器においてはチャートの使用率が著しく増加する。菖蒲谷池、荒坂、平安京右京五条二坊九町・十六町、大枝・以久田野・旗投・池上遺跡などでチャート製のナイフ形石器が出土している。こうした傾向は地域的なものと言うより、作るものの対象によって起こることがわかる。ナイフ形石器以外の縦長剥片素材の石器や石刃石核を見るとチャートが用いられる。こうした傾向は高槻市郡家今城遺跡C地点においても認められることである。

近畿地方以外から産出する石材には、黒曜石と硬質頁岩がある。黒曜石は、宇治市二子塚古墳(中川1992)から信州産と考えられる茂呂型ナイフ形石器が出土している。亀岡市鹿谷遺跡からは、黒色の黒曜石製の槍先形尖頭器が出土している。いずれも単体の出土で剥片などの製作時の遺物は出土していない。京都府北部地域では、縄文時代に入ると隠岐産の黒曜石を用いた石器が認め

られる。

丹後地域では、まだ確実な旧石器時代の遺物は発見されていないが、縄文時代の遺跡の石材利用状況を見ると、北陸地域の安山岩や在地の流紋岩、緑色凝灰岩、玉髓などの使用の可能性も指摘できる。当センターの田代弘氏によると緑色凝灰岩は旧丹後町から旧久美浜町(現京丹後市域)の海蝕崖に露頭があり、多くは軟質であるが転石の中には硬質な物も含まれるという(田代ほか1993)。また、玉髓は丹後半島の竹野川、溝谷川・宇川やその河口、丹後町や網野町の海岸部分で発見される。京丹後市の鳥取城跡(森島1989)では、玉髓製の削器・鉄石英製の剥片が出土しているが確実に旧石器時代と断定できる資料ではない。

#### 4. 石器編年について

京都府内では、石器群の変遷について多くの文化層を持つ遺跡は1か所も発見されていないため、層序を基にした石器の編年は行われていない。一方、火山ガラスの検出状態における始良火山灰との関連で、岩崎氏が、今里遺跡(長岡京右京第544次)・南栗ヶ塚遺跡(長岡京右京第570次)・神足遺跡(長岡京右京第807次)の編年案(岩崎2005)を提示している。

今里遺跡(長岡京右京第544次)では始良火山灰のガラスを包含した粘土層下位の礫層から剥片の打点部を基部に用いたサヌカイト製のナイフ形石器が出土している。始良火山灰ガラス包含層柱から南栗ヶ塚遺跡(長岡京右京第570次)では、サヌカイト製の多少変異があるものの国府型ナイフ形石器と考えられるサヌカイト製の石器が検出されている。神足遺跡(長岡京右京第807次)ではアカホヤと始良火山灰の間から瀬戸内技法以外の小型も横長剥片と、搬入石材を用いたマイクログリアの可能性がある石核が共伴している。

近畿においては細石刃文化期の遺物が極端に少なく、多くの場合サヌカイト以外の石材が利用される。神足遺跡の組成関係が正しいとすれば、サヌカイトの石器群は旧石器時代末でも細石刃文化を積極的に取り入れないことを示しており、細石刃文化期の遺物の少なさの原因を示すものとなる。

京都中部の丹波地域では、池上遺跡(田代2002・中川2004)においてチャート製のナイフ形石器・台形石器が出土している。台形石器の存在と使用石材から始良火山灰降灰以前の石器群の存在が指摘できる。同じ丹波地域においても蒲生遺跡のようにサヌカイト製の横長のナイフ形石器も存在している。京都府に隣接する兵庫県の七日市遺跡においてもチャート製のナイフ形石器や台形石器がサヌカイト製の横長のナイフ形石器と共伴していることから、丹波地域においては一概に年代差があると想定することはできない。いずれにしてもこの地域においては始良火山灰との関係のわかる良好な資料の発見が待たれる。

縄文時代草創期の遺跡の多くは、有舌尖頭器の単独出土である。近畿地方においてはチャート製のものが目立つと考えられがちであるが、京都府内ではサヌカイトを用いたものが多い。また、槍先形尖頭器も京都盆地周辺では鹿谷例を除くとサヌカイト製である。1995年の引地城跡(黒坪ほか1996)では、槍先形尖頭器1点、有舌尖頭器または槍先形尖頭器とともに石斧が出土してい

付表 京都府内の旧石器・縄文時代草創期遺跡一覧表

遺跡名	所在地	標高 (m)	ナイフ 形石器	台形 石器	石斧 石器	角錐 状石器	槍先 形尖頭器	有舌 尖頭器	搔器・ 削器	その他 石器	草創期 土器	文献 番号
途中ヶ丘	京丹後市峰山町長岡	.40						○				9・52
奈具岡	京丹後市弥栄町溝谷奈具岡	.30						○				49・52
小橋	舞鶴市小橋縄手	.5										9・52
奥野部	福知山市奥野部三ノ宮・宮ノ下	.35						○				16・52
武者ヶ谷	福知山市岡	.45									○	17
引地城跡	福知山市大江町南有路	.38			○		○					60
旗投	綾部市上杉町旗投他	.110	○						○			15・52
西原	綾部市西原町	.75						○				52
以久田野	綾部市栗大野	.70	○									52
塩谷古墳群	京丹波町曾根	.195						○				37
蒲生	京丹波町豊田	.178	○							石核		61
池上	南丹市八木町池上	.113	○	○								80・82
太田	亀岡市稗田野町太田	.105						○				77
鹿谷	亀岡市稗田野町鹿谷	.114					○					51
千代川	亀岡市千代川町北ノ庄・湯井	.107						○				48
高梨	京都市右京区京北周山町中山	.260					○					81
大枝	京都市右京区大枝東長町	.70	○			○			○			2・8・10・32
菖蒲谷	京都市右京区北嵯峨原山町	.180	○									3・75
大原野	京都市右京区大原野南春日町	.130						○				1
広沢池	京都市右京区嵯峨広沢町・山越乾町	.55	○					○	○			7
沢池	京都市右京区鳴滝沢・鳴滝三本松	.375	○									6・7・11・ 23・25
ケシ山	京都市左京区岩倉幡枝町	.178	○									4
中臣	京都市山科区栗栖野中臣他	.30	○					○	○			26・39
清閑寺霊山町	京都市東山区清閑寺霊山町他	.80					○					26
北白川追分町縄文	京都市左京区北白川追分町	.60										26
吉田橋町	京都市左京区吉田橋町	.50										26
上賀茂本山	京都市北区本山	.140					○					4
北野	京都市北区北野他	.70						○				26
公家町	京都市上京区京都御苑他	.46								石核		26
朱雀第6小学校内	京都市中京区西ノ京車坂町	.42	○									26
西ノ京桑原町	京都市中京区西ノ京桑原町	.32						○				26
朱雀第7小学校内	京都市中京区壬生東土居ノ内町	.30						○				26
平安京右京五条二坊九町・十六町	京都市右京区西院三蔵町	.28	○									43
北山	向日市向日町北山他	.57	○									8・27・32
殿長	向日市寺戸町殿長他	.21						○		翼状片 石核		27・28・32・ 36
岸ノ下	向日市寺戸町岸ノ下	.20	○									14・26・32・ 50
上里	長岡京市井ノ内北内畑他	.36	○									78
頭本	長岡京市井ノ内頭本	.42	○									12・20
今里	長岡京今里三～五丁目	.26	○					○	○			19・21・31・ 40・47・56・ 57・65・66・ 68・74・86
長法寺	長岡京市長法寺	.45	○									64
神足	長岡京市東神足他	.21	○									53・84

小池下	長岡京市長岡二丁目	27	○							29・32
舞塚	長岡京市今里舞塚	32					○			30・32
東代	長岡京市天神三丁目	37					○			87
十三	長岡京市天神一丁目他	24	○							42・63
開田	長岡京市開田他	25	○							38
開田城ノ内	長岡京市天神他	27	○							72
友岡	長岡京市友岡	24	○							58
伊賀寺	長岡京市下海印寺伊賀寺	31					○			24
南栗ヶ塚	長岡京市久貝二丁目	15	○				○			32・59
脇山	乙訓郡大山崎町円明寺鳥居前	37	○							67
山崎	乙訓郡大山崎町大山崎上の田	31	○							8・13・32
西集上り	宇治市菟道西集上り他	26					○			34
二子山古墳	宇治市五ヶ庄大林	26	○							46
宮垣内	宇治山田町奥山田宮垣内	270					○			22
金右衛門垣内	八幡市美濃山井ノ元	40	○							35
荒坂	八幡市美濃山荒坂	50	○							34
西ノ口	八幡市美濃山西ノ口	52	○				○			69
芝ヶ原	城陽市久世芝ヶ原	45	○				○			22・71
高ヶ峯	京田辺市天王高ヶ峯	250							石核	18
例幣	加茂町例幣						○			52
上井手	井手町井手二本松	110					○			5

る。細石刃核に比べ、京都府内で多く検出されていることから、縄文時代草創期の段階が確実に存在していたことはわかるが、良好な遺跡に恵まれてはいない。

(なかがわ・かずや=当センター調査第2課調査第2係主任調査員)

## 文献

1968年

- 1 三上貞二・袖岡正清「山城盆地における有柄尖頭器」『古代文化』第20巻8・9号 古代学協会

1970年

- 2 岡田光義「大枝旧石器の発見」『乙訓文化遺産』4号 乙訓の文化遺産を守る会
- 3 四出井晴子「京都市北嵯峨菖蒲谷池の石器」『古代文化』第22巻6号 古代学協会
- 4 田辺昭三「文明の始原」『京都の歴史』第1巻 京都市
- 5 山田良三「京都府井手町出土の有舌尖頭器」『古代文化』第22巻9号 古代学協会

1971年

- 6 小江慶雄・三上貞二「京都市沢池遺跡」『京都教育大学紀要』SetANo.39 京都教育大学
- 7 四出井晴子・木村孝雄・武山峯久「京都市広沢・沢池の石器」『古代文化』第24巻10号 古代学協会
- 8 都出比呂志・四出井晴子編『京都府乙訓地方の石器 資料編』乙訓の文化遺産を守る会日曜日会

1972年

- 9 坪倉利正・釋龍雄「京都奥丹後地方発見の有舌尖頭器」『古代文化』第24巻1号 古代学協会
- 10 藤岡謙二郎編『洛西ニュータウン地域の歴史地理学的調査』

1974年

- 11 旧石器文化談話会「京都市沢池発見の石器」『プレリユード』18 旧石器文化談話会

1975年

- 12 岩崎誠「石見遺跡紹介(二)」『乙訓文化遺産』32号 乙訓の文化遺産を守る会
- 13 都出比呂志「島本のあけぼの」『島本町史』 島本町史編さん委員会・島本町

- 14 百瀬正恒「長岡宮跡6A地区発掘の成果と問題点」『乙訓文化遺産』33号 乙訓の文化遺産を守る会  
1976年
- 15 中村孝行「原初の石器」『綾部市史』上巻 綾部市
- 16 渡辺誠「縄文時代」『福知山市史』第1巻 福知山市  
1977年
- 17 渡辺誠・鈴木忠司編『武者ヶ谷遺跡発掘調査報告書』 福知山市教育委員会  
1979年
- 18 鈴木重治「山城出土の旧石器」『考古学ジャーナル』167 ニューサイエンス社
- 19 高橋美久二・奥村清一郎ほか「長岡京跡昭和53年発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』  
京都府教育委員会
- 20 岩崎誠「石見遺跡分布調査略報」『乙訓文化遺産』37号 乙訓の文化遺産を守る
- 21 高橋美久二・長谷川浩一ほか「長岡京右京第26次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報(1980)』  
2分冊 京都府教育委員会、
- 22 山田良三『芝ヶ原遺跡発掘調査報告書』 芝ヶ原遺跡調査会  
1981年
- 23 田頭澄「京都市右京区沢池採集のナイフ形石器」『旧石器考古学』22 旧石器文化談話会  
1982年
- 24 高橋美久二・辻林磨宏「長岡京跡右京第70次(7AN0IR地区)発掘調査概要」『長岡京市文化財調査報告』  
長岡京市教育委員会
- 25 美勢博史「京都市右京区沢池採集の石器」『旧石器考古』24 旧石器文化談話会  
1983年
- 26 梅川光隆・吉川義彦「先土器時代」『史料京都の歴史』第2巻 京都市
- 27 高橋美久二「旧石器文化」『向日市史上巻』 向日市
- 28 渡辺博・山中章「長岡宮第117次(7AN11E地区) - 北辺官衙 - 発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第10集 向日市教育委員会  
1984年
- 29 中尾秀正「昭和52～55年度長岡京市内遺跡立会概要 長岡京跡第7814次(7ANKKS地区)立会調査概要」  
『長岡京市文化財調査報告書』第12冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所
- 30 山口博・肥後弘幸「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第9冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
1985年
- 31 岩崎誠「右京第186次(7AN1ST-6地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度  
(財)長岡京市埋蔵文化財センター  
1986年
- 32 岩崎誠「乙訓地域の旧石器史料集成」『長岡京古文化論叢』 中山修一先生古稀記念事業会
- 33 鈴木重治・中川和哉「山城美濃山荒坂採集のナイフ形石器」『旧石器考古学』36 旧石器文化談話会  
1987年
- 34 荒川史ほか『京都府遺跡調査報告書』第7冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 35 中川和哉「金右衛門垣内発見のナイフ形石器」『旧石器考古学』34 旧石器文化談話会
- 36 山中章・中川和哉「長岡宮第176次(7AN11H地区) - 北辺官衙(北部)・殿長遺跡 - 発掘調査概要」

『向日市埋蔵文化財調査報告書』第21集 向日市教育委員会

1990年

- 37 伊野近富「塩谷古墳群平成元年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 38 小田桐淳「右京第314次(7ANKST-2)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 39 (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館「山科盆地の大集落 中臣遺跡」『リーフレット京都』No.11 (財)京都市埋蔵文化財研究所

1991年

- 40 岩崎誠「右京第346次(7ANHTC地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 41 岩崎誠「旧石器時代」『長岡京市史』資料編 長岡京市
- 42 小田桐淳「右京第344次(7ANKJC地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 43 定森秀夫ほか『平安京右京五条二坊九町・十六町』 京都文化博物館
- 44 田代弘「蒲生遺跡第4次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第42冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 45 中川和哉「淀川流域の旧石器文化の一様相」『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

1992年

- 46 荒川史・中川和哉「宇治五ヶ庄二子塚古墳の黒曜石製ナイフ形石器」『旧石器考古学』45 旧石器文化談話会
- 47 岩崎誠「右京第362次(7ANITT-14地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成2年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 48 森下衛ほか『京都府遺跡調査報告書 千代川遺跡』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

1993年

- 49 田代弘ほか「奈良岡遺跡」『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 50 中塚良「長岡宮跡第270次(7AN12M地区)調査～北辺官衙(南部)、岸ノ下遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』36集 (財)向日市埋蔵文化財センター
- 51 野島永・河野一隆「鹿谷遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 52 長谷川達『石の考古学』 京都府立丹後郷土資料館
- 53 原秀樹「右京382次(7ANMWY-5)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成3年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

1994年

- 54 内田好昭「31 法勝寺跡・岡崎遺跡」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市文化財研究所
- 55 岩崎誠「右京第417次(7ANINC-5地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成4年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 56 木村泰彦「右京第403次(7ANIHY-3地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成4年度

- (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 57 原秀樹「右京第412次(7ANIKI地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成4年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター  
1995年
- 58 木村泰彦「右京第453次(7ANNND-2地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成4年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター  
1996年
- 59 岩崎誠「右京第473次(7ANQKS-2地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成6年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 60 黒坪一樹ほか「引路城跡・南有路城跡」『京都府遺跡調査概報』第72冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 61 近澤豊明「西原遺跡」『綾部市文化財報告書』第23集 綾部市教育委員会
- 62 中川和哉「第2章第1節人類の足あと」『長岡京市史本文編1』長岡京市史編さん委員会・長岡京市
- 63 引原茂治・奈良康正「長岡京跡右京第498次調査概要(7ANKNZ-8地区)」『京都府遺跡調査概報』第72冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 64 山本輝雄「右京第482次(7ANJMN-2)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成6年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター  
1997年
- 65 岩崎誠「右京第505次(7ANIHN)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成7年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 66 岩崎誠「長岡京跡右京第544次今里遺跡発掘調査報告書」(財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 67 野々口陽子「長岡京跡右京第541次・脇山遺跡」『京都府遺跡調査概報』第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
1998年
- 68 岩崎誠「右京第544次(7ANINC 7地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成8年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 69 黒坪一樹ほか「一般地方道富野荘八幡線関係遺跡(西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・備前遺跡)発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
1999年
- 70 有井広幸「成勝寺・岡崎遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第86冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 71 小泉裕司「芝ヶ原遺跡」『城陽市史』第3巻 城陽市
- 72 戸原和人「長岡京跡右京第620次(7ANKNA-2地区)発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第88冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 73 原秀樹「右京第570次(7ANRHM-3)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成9年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター  
2000年
- 74 岩崎誠「右京第544次(7ANINC 7地区)調査」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第19集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
- 75 菅田薫「菖蒲谷池採集の石器」『リーフレット京都』No.136 (財)京都市埋蔵文化財研究所

2001年

- 76 鈴木忠司「縄文以前の乙訓郡」『乙訓文化遺産』第8号 乙訓の文化遺産を守る会  
77 戸原和人ほか「太田遺跡第13次調査概要」『京都府遺跡調査概報』第99冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

2002年

- 78 原秀樹「右京第694次(7 ANGKH-1)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成12年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター

2003年

- 79 岩崎誠「右京第713次(7 ANMMK-6地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成13年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター  
80 田代弘「池上遺跡第8次調査概要」『京都府遺跡調査概報』第108冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

2004年

- 81 田代弘「高梨遺跡第3次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第111冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
82 中川和哉「池上遺跡第13・18次調査概要」『京都府遺跡調査概報』第112冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
83 木村泰彦「右京第752次(7 ANKDD-4)調査略報」「右京第752次(7 ANKDD-4)調査略報」(財)長岡京市埋蔵文化財センター

2005年

- 84 岩崎誠・檀原徹ほか『長岡京跡右京第807次発掘調査報告』(財)長岡京市埋蔵文化財センター  
85 中川和哉「案察使遺跡第5・6次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第116冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

2006年

- 86 岩崎誠「右京832次(7ANITT-17地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成16年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター  
87 木村泰彦・岩崎誠「右京838次(7ANPHI-4地区)調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報平成16年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター

上記以外の文献

- 大船孝弘・富成哲也1976『津之江南遺跡発掘調査報告書 三島地方の旧石器について』高槻市教育委員会  
大船孝弘・富成哲也1978『郡家今城遺跡発掘調査報告書 旧石器時代遺構の調査1・2』高槻市教育委員会  
久保弘幸・藤田淳編1990『七日市遺跡( ) (旧石器時代遺跡の調査)』兵庫県教育委員会  
中川和哉ほか2000「池上遺跡第5次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
中川和哉・檀原徹2000「東山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』92冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
森島康雄1989「鳥取城跡」『京都府遺跡調査概報』34冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
山口卓也編1991『板井寺ヶ谷遺跡 旧石器時代の調査』兵庫県教育委員会

## 玉類製作技法の検討 市田齊当坊遺跡出土の管玉孔内に遺存する石針を巡って

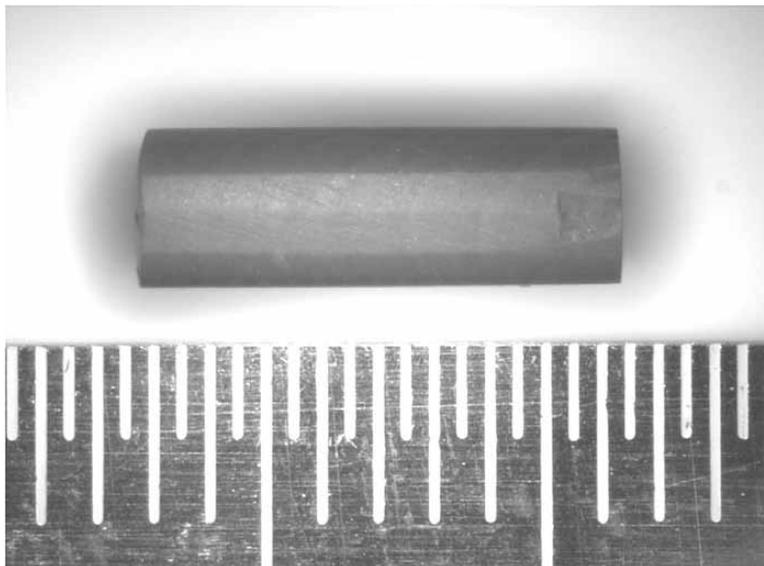
石井 清司・岩松 保・田代 弘

### 1. 共同研究にいたる経過

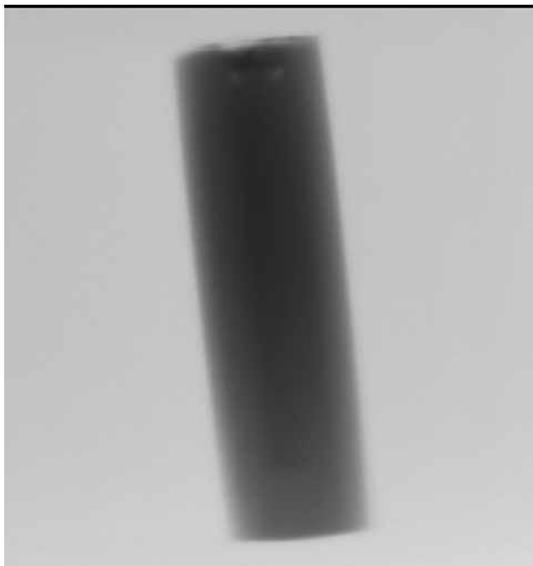
石針の用途を巡っては、管玉穿孔に関わる道具であるとの共通認識はあるものの、孔さらえなどの補助的道具とする説と、穿孔具そのものであるとする説に分かれていて見解の一致をみていない。<sup>(注1)</sup>このような中、京都府久御山町市田齊当坊遺跡<sup>(注2)</sup>において石針の用途を知る手がかりとなる遺物が(管玉未製品202)(第1図)出土した。この管玉未製品202は、石針が管玉の孔の中で折損した状態で出土したのである。この石針がどの程度遺存しているか肉眼では分からなかったので、(株)パリノ・サーヴェイ辻本氏の紹介により、東京大学総合研究博物館吉田邦夫氏に、X線CTによる連続断層画像の撮影をお願いすることとなった。

その結果については、調査報告書の中に吉田氏による詳細な報告文(付論1「穿孔途中の管玉と玉錐」)を掲載したところである。その中でも触れられたが、石針は長さ1mmにも満たないところで折れていたため、分析中に管玉から石針がはずれるという予想外の結果となった。そのアクシデントが幸いして、管玉の穿孔途中の内部を肉眼および実体顕微鏡で観察すると錐糞および研磨剤と判断されるペースト状の物質が孔底に詰まっていることが判明した(第2・3図)。このような資料は、日本で初めて確認されたものであり、重要なものであるが、整理報告の最終段階で判明したことであり、それ以後の作業は、調査報告書刊行後の宿題として残された。報告書作成を担当した野島永が、平成16年3月に退職したこともあって、先の宿題は報告書作成に係わった者たちに託された。

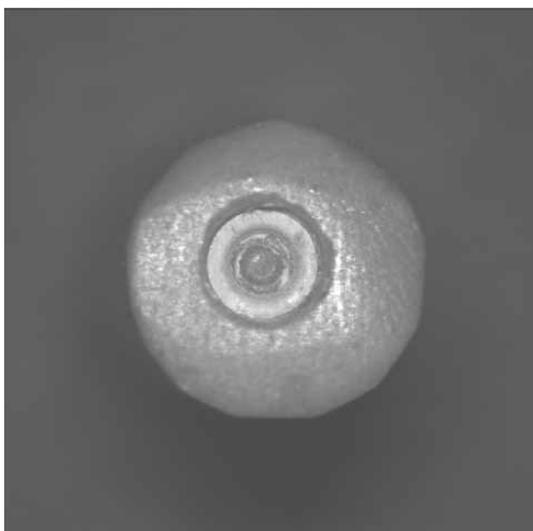
こうした経過をうけ、平成16年度から「玉製作技法の検討」と題して、2か年にわたる共同研究がスタートした。報告書作成時に野島をサポートした石井



第1図 市田齊当坊遺跡出土の管玉未製品202



第2図 市田斉当坊遺跡出土の管玉未成品202  
X線透過写真



第3図 同上 上端面からの画像

清司・岩松保に、平成17年度に田代弘を加えた3名が錐糞・研磨剤の成分を分析し、玉作りにおける穿孔の問題点を明らかにするものであった。

## 2. 市田斉当坊遺跡の概要と石針について

### (1) 遺跡の概要

当調査研究センターは、第二京阪・京都南道路の建設に先立ち、平成9年度に久世郡久御山町域の試掘調査を実施し、同町市田周辺に、新たな遺跡が分布していることが明らかとなった。新発見の遺跡は市田斉当坊遺跡と命名され、平成10～13年度にかけて、幅約40m、長さ約300m、総調査面積10,000㎡にわたって発掘調査を実施した。その結果、弥生時代の遺構として長さ約150mの居住区の南北に、方形周溝墓を中心とした墓域が分布していることが明らかとなった。

居住区と推定される区域の1/3は地震による曲隆や現道のために、竪穴式住居跡はほとんど見つからなかったものの、ほかの区域では竪穴式住居跡95基以上、方形周溝墓45基以上、井戸2基、大溝5条以上を検出し、南山城地域を代表する弥生時代中期の拠点集落であることが判明した。

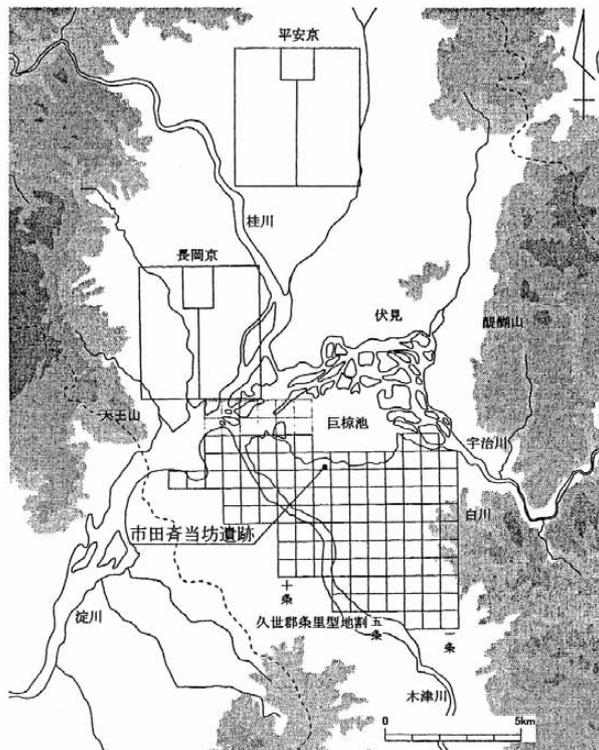
市田斉当坊遺跡の調査以前には、南山城地域でも低地の調査が実施されていたが、乙訓地域や北

山城地域と比べて、弥生集落の分布が希薄であり、しかも、大規模な集落が見つかっていなかった。この市田斉当坊遺跡は低地に立地し、かつて存在した巨椋池の南岸に位置する。河内潟の周囲に大規模な弥生集落が分布しているのと同様の状況が、ここ南山城地域の巨椋池の周囲にも展開していたものと想定された(第4図)。

上述の遺構以外にも、市田斉当坊遺跡では多量の土器・石剣・石庖丁・石斧が出土し、報告書では、南山城地域の弥生時代の土器編年基準資料として、また、石器の製作技法と再利用という視点で考察が加えられた。

この調査の中では、出土遺物、特に注目されたのが玉作り関連遺物の大量出土である。玉作り関連遺物としては、砥石・石鋸・石針・玉、およびそれら製作途上の未製品および原石、サヌカイト剥片などが多量に出土した。住居跡の埋土を持ち帰り洗浄すると、これらの遺物は、量の多寡はあるが、すべての住居跡の埋土に含まれていると言っても過言ではない状況であった。その

中でも床面で碧玉破片・紅簾片岩破片・砥石などが特に集中して出土したのが、竪穴式住居跡S HA90、S HC451であった。また、両住居跡の埋土中からは、多量のサヌカイト製石針（未製品を含む）も出土している。これらの出土遺物の状況から、数多くの住居跡の中で、少なくとも、竪穴式住居跡S HA90(第5図)、S HC451の両竪穴式住居で、玉作りが実際に行われていたことが確認されている。これらの遺構は弥生時代中期中葉までには竪穴式住居がつくられ、この段階で市田斉当坊弥生集落では、サヌカイト製磨製石針が製作され、使用されていたと判断される。

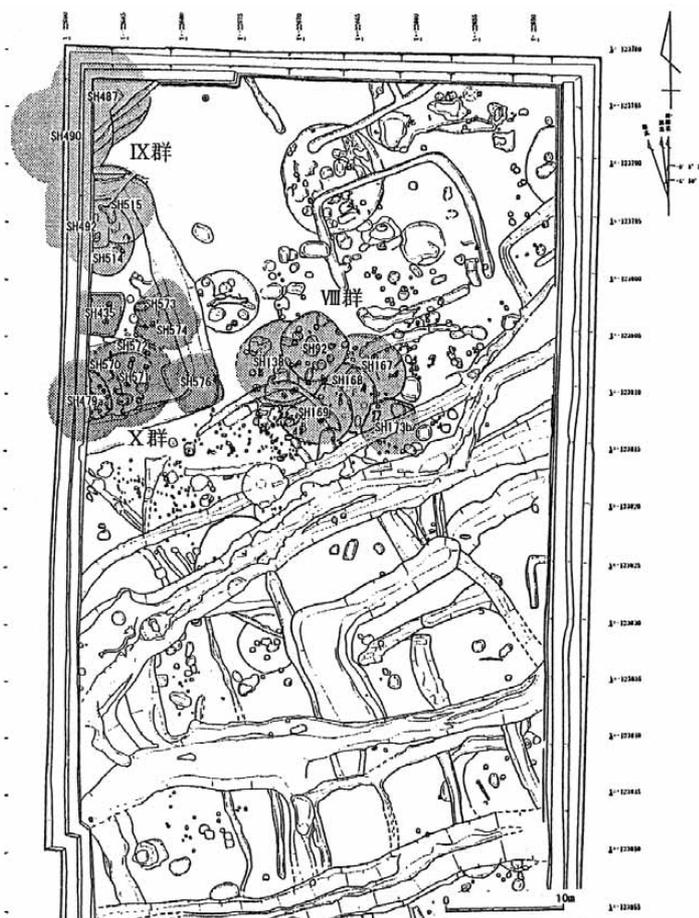


このように、遺構の年代観から見ると、市田斉当坊遺跡におけるサヌカイト製磨製石針は、畿内第 様式の土器に伴出することから、製作と使用は、列島では最も早い段階のものと考えられる。

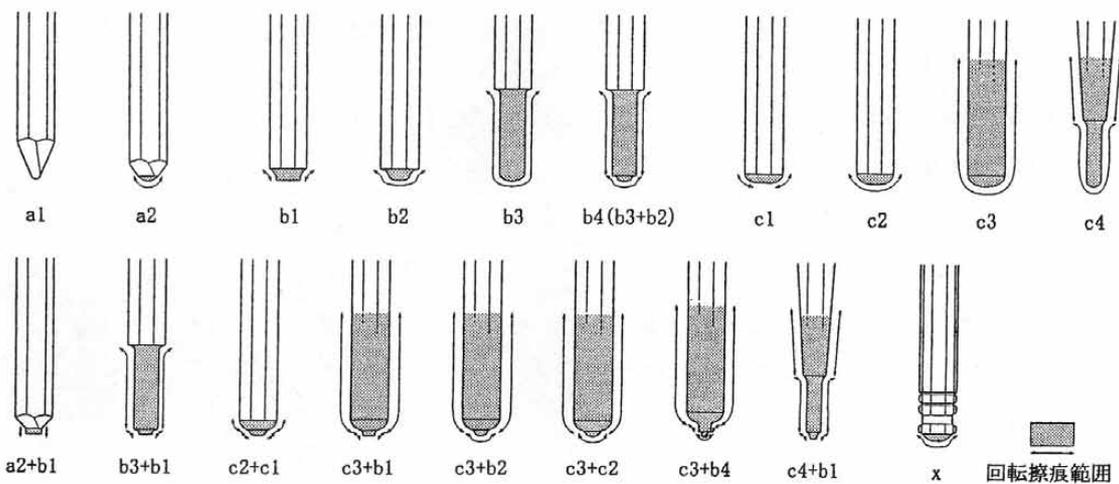
第4図 市田斉当坊遺跡調査地周辺の歴史的環境略図

(2) 市田斉当坊遺跡の石針

市田斉当坊の報告書をまとめた時点では、石針の先端部の観察・分類と穿孔途中の管玉の孔の形状や擦痕の観察を中心に行われた。第6図に掲げた石針頭部先端の分類では、石針頭部形態a1類を除き、すべて円柱状の石針先端に螺旋状の擦痕が認められた。そのため、これらさまざまな形状の石針頭部は、石針製作途上の加工にとまなうものではなく、管玉の穿孔に用いられた結果、その形状になったと、報告書作成にあたった野島・望月両氏は考えた。先端のさ



第5図 市田斉当坊遺跡C地区遺構配置図



第6図 サヌカイト製石針先端部形態図(『京都府遺跡調査報告書』第36冊 市田斉当坊遺跡から)

さまざまな形状は、穿孔作業のために使用された結果とすれば、多様な形態は製作工程における使用の段階差を示していると考えられる。形態がどのように使用されて形成されたのかを基に、製作方法を復原すると以下のようなになる。

まず、穿孔前に、石針の軸が振れないよう、小さな凹み(下孔)を施す。先端が尖った石針(a 1類)を回転させ、三角錐状になる凹みを付ける(a 2類となる)。いわゆる「先付け」である。市田斉当坊遺跡出土の石針中に「先付け」で凹みをつけただけのものは確認できていない。

先付けの穴を足がかりに、丸い先端の石針(a 2類)を回転させて穿孔する。

以後、穿孔の状況に応じ、石針を取り替えながら、研磨剤を用いて回転させて、穿孔をおこなっていく。研磨剤が石針とともに回転することにより、多様な形状が生じたと推測される。

複合形態の石針は、「孔さらえ」を行った時に形成されたか、個別の孔を大きく、深く開けていく際に、臨機応変に使い分けられた結果と考えるか、判断できない。

また、管玉に残る穿孔途中の孔の形状と石針の先端部の形状を比較すると、石針の先端部は複雑な形状をとる。このような穿孔先端部分が孔の形状と一致しないのは、研磨剤を使用したことによると推測される。

#### 4. 管玉孔内に遺存する石針

##### (1) 市田斉当坊遺跡の事例

第1図が、共同研究で取り上げた管玉未成品202である。管玉未成品202は、平成14・15年度の調査報告書作成に向けての整理作業中に発見したもので、長さ8.8mm、直径2.9mmの管玉に、穿孔途中の石針が折損して突き刺さったまま遺存していることがX線透過写真で確認できるものである(第2図)。

市田斉当坊遺跡では多量の管玉未製品が見つかるが、石針が遺存しているものは、この一例のみである。この管玉未成品202は竪穴式住居跡S HC571の埋土から出土したもので、ほかに石針や同未製品、碧玉玉材があるが、調査時の所見では、特に床面に多量の玉作り関連遺物が

集中していたものではなかった。この竪穴式住居跡の時期を判別する土器の出土は見なかったが、市田斉当坊遺跡の竪穴式住居跡の分布とその時期別の推移から、弥生時代中期中葉あるいは後葉のもので、竪穴式住居跡 S HA90は市田<sup>(注3)</sup>3期(森岡秀人氏の編年でいう山城 - 1 様式)、S HC571は市田2期(森岡秀人氏の編年でいう山城 - 3 様式)から市田3期に造営されたと考えられている。

孔に刺さっていた磨製石針は、1 mmが遺存していた。第9図は吉田氏が撮影したCTスキンの連続断面画像である。16 μm間隔での撮影ということであるので、0～60の写真に石針が写っていることから、石針の長さは0.976mmとなる。先端は中央部の凸部とその周囲の凹部があり、凹部のはじまりから凸部の先端までは0.36mmで、孔の直径は1.06mmで、石針先端部の直径は0.70mmである。

この石針は、報告書の分類で言うとb1類もしくはb3 + b1類の先端部形態である。このことから、先付けを行った後に、少なくとも1 mm程度の深さの穿孔を行うにあたって使用される石針のひとつがb3類であったことは明らかである。上述のように、孔の形状と石針の形状とは微妙に異なっているものと

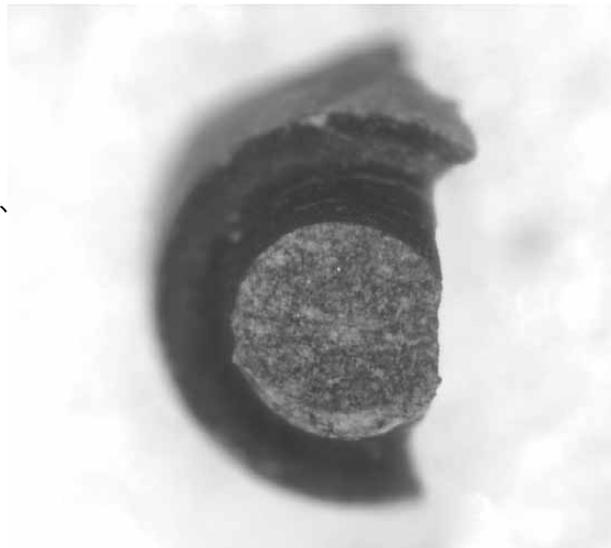
想定されたが、第2図のX線写真を見ても、石針と孔との間に隙間が見てとれる。どの形態の石針で穿孔するとどの形状の孔になるのか、まったく想定できなかったが、少なくとも、管玉未成品202の孔の形状は、遺存していた石針の形態で作られたことは間違いない。上記で復原した穿孔プロセスが妥当であるかどうかの判断材料にもなるう。

穿孔途中に排出されたとされる錐糞もしくは研磨剤と想定される物質が、管玉未製品202では実際に遺存していた。この物質が錐糞(サヌカイト屑)であるのか、研磨剤(石英ほかの造岩鉱物)であるのか、あるいは管玉と石針の隙間に混入した泥土であるのかを理化学的手段によって解明することで、当時の玉作りの大きな謎である。

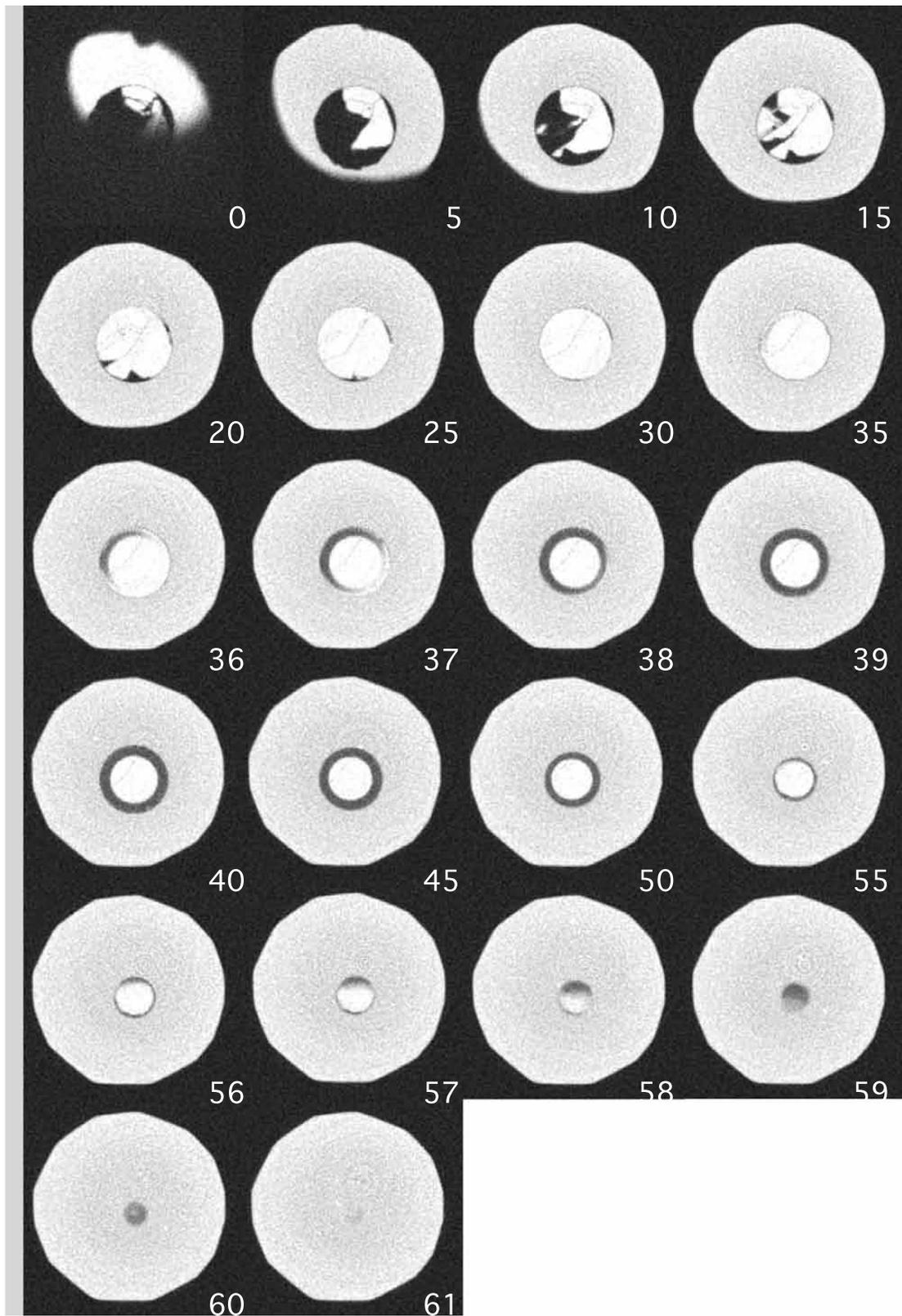
錐糞あるいは研磨剤と思われるものは、孔の中に遺存していたが、その位置関係から、先端部の凹部に詰まっていたようである。第3図を見て明らかのように、凹部が擦れて、磨かれたよう



第7図 石針(玉錐)先端部(1)



第8図 石針(玉錐)先端部(2)



第9図 管玉未成品202連続断面画像 (各画像の右下の番号は、最上部(0)からの枚数である。したがって、数字の差が5であれば、 $16\mu\text{m} \times 5 = 80\mu\text{m}$ の間隔があいていることになる。)

な光沢があるのに対して、先端の凸部や石針の本体部分には、回転による擦痕がさほど認められない。また、褐色の物質が、石針の本体部分の側面に付着しており、正円ではなく楕円形に近い石針の隙間から自然に外側に送り出されたものである可能性もある。錐糞あるいは研磨剤とみられる物質の理化学的分析を試みたが、石針が脱落して間もなく粉塵となり遺失したため、実現できなかった。

石針先端と玉体間に生じた空間とそこに充填されていた物質の性質を考える上で参考になる事例がほかに2つある。京都府加悦町(現与謝野町)日吉ヶ丘遺跡<sup>(注4)</sup>、新潟県佐渡市竹の花遺跡<sup>(注5)</sup>の事例である。これらも管玉孔内に石針が折損して遺存する事例である。

## (2) 京都府加悦町日吉ヶ丘遺跡と新潟県佐渡市竹の花遺跡の事例

京都府加悦町日吉ヶ丘遺跡と新潟県佐渡市竹の花遺跡の詳細については各報告に譲ることとして、ここでは、加悦町教育委員会(現与謝野町教育委員会)、新潟県立歴史博物館、東京大学の吉田氏のご協力により確認させていただいた、レントゲン写真から判ることを記しておく。

2資料とも、孔の深い位置で石針が折損している。予備穿孔の段階を越えた段階にある。孔さらえとして補助的な使用状況を積極的に示すものではない。深部に食い込んで折損した状況が見て取れ、穿孔そのものの状況を示すものとするのが妥当である。

2例とも、石針先端と器体の間に隙間が認められる。市田斉当坊遺跡の事例から推測すると、いずれも、この隙間に、微細砂が詰まっていた可能性を考えていいたろう。

市田斉当坊遺跡の事例においては、石針先端に回転使用によって生じたと見られる線条痕が認められる。石針先端は断面が凸形であり、これに対して微細砂は凹形をなし、玉体との空隙を埋めている。微細砂が、玉体と石針先端の間に介在し、両者は接触していないことが確認できるので、石針先端に生じた線条痕は、石針と微細砂の回転摩擦によって生じたものと見ることができる。一方、玉体に生じた穿孔断面形は、「U」字形である。石針断面形状ではなく、微細砂の充填断面に符合することが確認できる。以上の2点から、玉体穿孔部にみられる回転摩擦痕は、石針先端との接触によるものではなく、石針先端がそうであったように、微細砂との回転摩擦によって生じたと見ることができる。

つまり、微細砂は、石針先端に加えられた回転運動と圧力を受け、玉体に回転摩擦痕を生じさせたとみることができる。

以上のことから、微細砂の役割は、研磨剤と推測できるのである。

## 6.まとめ

市田斉当坊遺跡の整理作業を通じて、弥生時代中期中葉の土器を含む竪穴式住居跡から管玉未製品を検出した。この管玉未製品では、石針が管玉の孔の中で折損していることが明らかとなり、肉眼観察のほか、X線CTなどにより石針先端と管玉内に空間があること、石針の観察から回転による擦跡のようす、石針自体が正円でなく楕円形に近いものであることなどが観察でき、その観察結果から、石針の主たる用途が、穿孔のための工具であると考えられるとの結論に達した。

今回の共同研究では、管玉未製品の中に残っていた錐糞および研磨剤と判断されるペースト状の物質がどういふものであるかとの結論までには至らなかったが、今後、ほかの遺跡でも市田斉当坊遺跡での管玉内に石針がそのまま刺さった状態の例(前述の京都府日吉ヶ丘遺跡や新潟県の竹の鼻遺跡など)が増加して分析を進めて行けばさらに明解な答えが見つかるものと思われる。

この共同研究では、肉眼および実体顕微鏡の観察により、擦痕が高速もしくは低速でつけられたものか、対象物の硬さなどを推測することで、製作工程を復原することや、管玉の孔および内面の擦痕をシリコンで写し取るなどのアイデアも出されたが実現できなかった。

(いしい・せいじ=当センター調査第2課調査第3係長)

(いわまつ・たもつ=当センター調査第2課調査第1係主任調査員)

(たしろ・ひろし=当センター調査第2課調査第3係主任調査員)

注1 管玉の製作工程のうち、穿孔工程は完成製品に近い、表面が多面体の段階に行われ、穿孔する端面を研磨したのち、穿孔が行われる。この穿孔工具として古墳時代には鉄針の使用が一般的であるが、鉄針に先行する打製石針・磨製石針の用途については意見が分かれているところもある。

石針を回転させて穿孔した場合、孔内の錐糞を排出しないと錐糞で回転穿孔が困難となる。弥生時代の両方向からの穿孔であることから孔のくい違い、壁の修正、「孔サラエ」という副次的な用途として石針を使用したとの意見(A案)と打製石針・磨製石針の主体用途が穿孔工具であるとの意見(B案)がある。

A案は穿孔には主な役割として鉄錐がはたし、予備穿孔具あるいは穿孔の孔の補正などの補助的な工具として石針を使用したと考える説である。寺村光晴は「玉作と流通」において両方向から穿孔するとそれぞれの孔のくい違い、交点の貫通部分に段ができ、その段をさらって綺麗にする「孔サラエ」の工具として石針を位置づけている。

これに対してB案は、福井県下屋敷遺跡の報告において富山正明氏が磨製石針を玉錐(ドリル)として評価した。石川県地方遺跡の報告書では、石針を積極的に評価し、石針の先端の形状が穿孔作業に使用された結果、多様な形態に変化したものと位置付けた。A案を支持する寺村氏が指摘するように、石針のドリルと仮定すると、穿孔時に生じる石針の管玉から生じる錐糞が管玉から出る所がなくなり、孔が開かないとの指摘がある。市田斉当坊遺跡の(報告書遺物番号220)を観察すると、管玉の内孔が正円であるのに対して、石針は肉眼では正円のように見えるが、楕円形を呈していること。また吉田邦夫氏によると京都府旧加悦町(現与謝野町)日吉ヶ丘遺跡の穿孔途中の石針の形状は先端部分がほぼ真円に近く、直ぐ楕円形になり、基部はひし形に近い形状であり、寺村が指摘するような錐糞が詰まることがない形状であることが指摘されている(吉田邦夫「日吉ヶ丘遺跡出土の穿孔途中の管玉と玉錐」、注4文献収録)。

注2 野島永・望月誠子ほか『市田斉当坊遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004

注3 森岡秀人「山城地域」(寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年』近畿編 木耳社) 1900

注4 加藤晴彦ほか『日吉ヶ丘遺跡』(加悦町文化財調査報告第33集 加悦町教育委員会) 2005

注5 寺村光晴「玉作とその流通」(大田区立郷土博物館編『ものづくりの考古学 - 原始・古代の人々の知恵と工夫 - 』東京美術) 2001、この資料については佐渡市教育委員会・新潟県立博物館のご協力により遺物の観察を行った。

# 1. 城谷口古墳群

所在地 南丹市八木町北広瀬  
調査期間 平成18年4月11日～7月13日  
調査面積 900㎡

はじめに 今回の発掘調査は、南丹市の八木工場団地北広瀬地区開発事業に先立ち実施した。城谷口古墳群は、方墳5基以上、円墳10基以上からなる古墳群である。この古墳群は、旧八木町の中央部にあるいかだもりやま筏森山南西の谷に展開している。なお、筏森山から派生する丘陵上には、前方後円墳を含む数10基の古墳からなる筏森山古墳群が存在する。

調査概要 各古墳の調査内容について、以下簡単に記しておきたい。

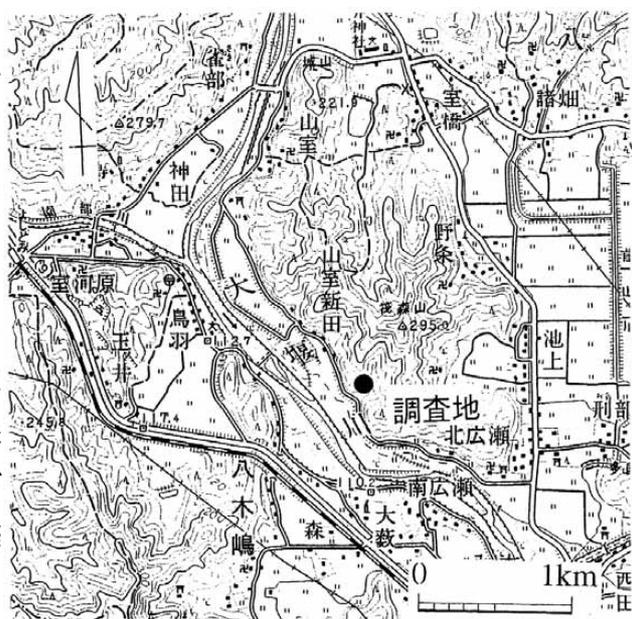
1号墳 6世紀後半の直径約12mの円墳で、主体部は無袖の横穴式石室である。出土遺物は、盗掘を免れたものが奥壁隅部から見つかった。

2号墳 6世紀前半の直径約11mの円墳で、主体部は両袖の横穴式石室である。石室の玄門部と奥壁部には赤色顔料が塗られていた。3回以上の追葬が確認でき、石棺状に石を立てた石障が奥壁部と右袖部に設けられていた。奥壁部の石障からは、全長70cm弱の蛇行剣と直刀が出土している。右袖部の石障では、須恵器の杯を枕に用いた頭骨が検出された。

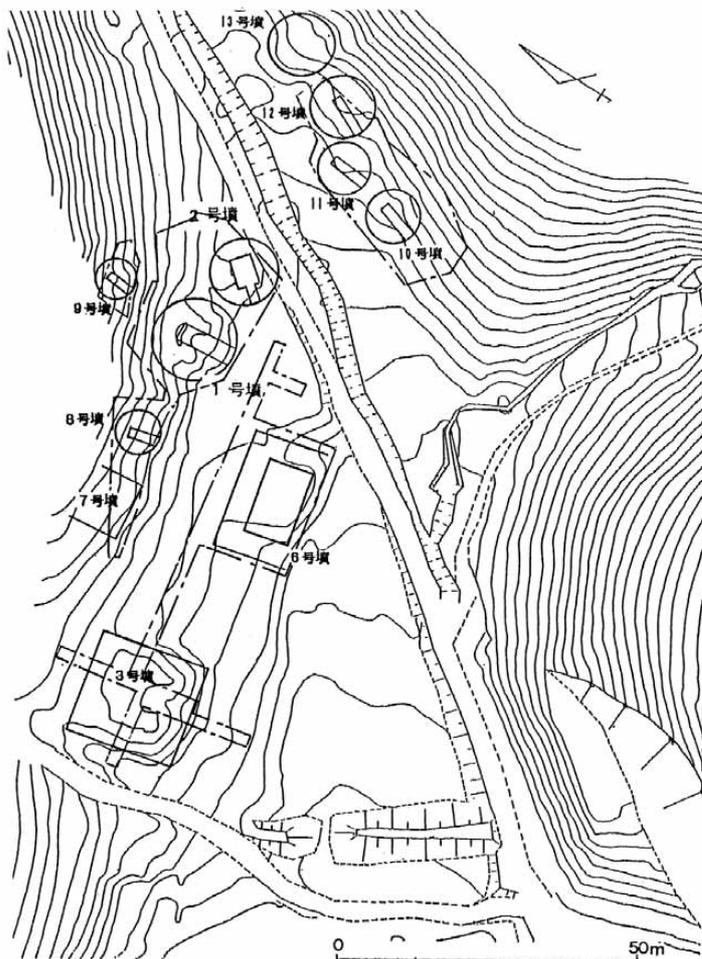
3号墳 一辺が20mを越す方墳で、埋葬主体部は木棺直葬である。墳丘の各辺には葺石が施され、墳頂部までの高さ約5mを測る。出土遺物は、主体部の部分的調査で管玉を検出した。遺物から4～5世紀の築造と考えられる。

6号墳 昨年度の試掘調査によって確認された方墳である。墳丘は、長辺約12m、短辺約8mを測り、四辺に葺石をもつ。山側の三方に幅約4mの周溝が掘られているが、谷側の周溝の有無については不明である。前年度の試掘調査の際、約95cmの直刀が出土したが、今回の調査で新たに木棺直葬の主体部を検出した。主体部からは、鉄鏃・鉄鎌・鉄鑿・刀子、白玉などの遺物が出土した。遺物の時期から5世紀前半の築造になる古墳であることがわかった。

7号墳 5世紀頃の方墳で、三方向に葺



第1図 調査地位置図(国土地理院1/50,000西北部)



第2図 城谷口古墳群地形図および古墳分布図

石をもつと考えられる。主体部は木棺直葬である。古墳の規模は大部分が調査区外となるため確定できない。出土遺物には、直刀・剣、白玉などがある。

8～12号墳 いずれも6世紀後半～7世紀の円墳で、主体部は無袖の横穴式石室である。標高の最も高い場所に位置する9号墳がこのうち最も新しい時期に造られたものである。

13号墳 主体部が調査区外になるため、今回の調査では墳丘裾の確認調査を実施した。

まとめ 発掘調査の結果、城谷口古墳群のある南西向きの谷部には多くの方墳、円墳があることがわかった。古墳群の構成では、方墳が古墳時代中期、円墳が同後期と、同じ地域に営まれた古墳であるが、時期によって墳形が異なる。また、石室導

入期からの変遷を追うことができることがわかった。出土遺物など興味深いものもあり、今後の整理によって論点を整理して行きたいと考える。なお、各古墳の墳丘規模や出土遺物の詳細については、現在整理中のため、今後の報告で若干の変更があることを御了承いただきたい。

(中川和哉)



第3図 城谷口6号墳(東から)

## 2 . <sup>のじょう</sup>野条遺跡第11次・<sup>むろはし</sup>室橋遺跡第4次

所在地 南丹市八木町室橋  
 調査期間 平成18年5月18日～9月8日  
 調査面積 1,060m<sup>2</sup>

はじめに 野条遺跡・室橋遺跡は、南丹市八木町室橋に所在する集落遺跡である。この遺跡は、八木町(現南丹市)教育委員会と京都府教育委員会の分布調査、試掘調査により、古代から中世にかけて営まれた遺跡であることが確認されている。

今回の調査は、野条遺跡、室橋遺跡の両遺跡地内において府営経営体育基盤整備事業が計画されたことから、京都府農林水産部の委託を受け、事前調査として実施した。

野条遺跡および室橋遺跡は、<sup>いかだもりやま</sup>亀岡盆地の北端に位置する筏森山の東麓に位置している。筏森山は、旧八木町域を東西に二分する山塊で、山上には多数の古墳、中世の山城などが確認されている。豊かな田園風景が広がる東麓には、池上遺跡など、弥生～鎌倉・室町時代にかけての集落遺跡が広範囲に分布している。この両遺跡は、こうした集落の一つである。このあたりは、かつて、園部盆地へ通ずる交通の要衝として賑わった地域である(第1図)。

### 調査概要

#### (1)野条遺跡第11次調査(第2・3図)

1) 用水路とみられる大溝が2本みつかった(S D01・04)。これまで平安時代のものは検出されていたが、奈良時代にさかのぼる事例は初めてである。野条遺跡付近の水田が奈良時代から営まれていた可能性を示す遺構である。

2) 溝は、これまで推定された遺跡範囲を超えて、さらに北側にのびていることがわかった。遺跡範囲の見直しにつながる発見である。

#### (2)室橋遺跡第4次調査(第4～7図)

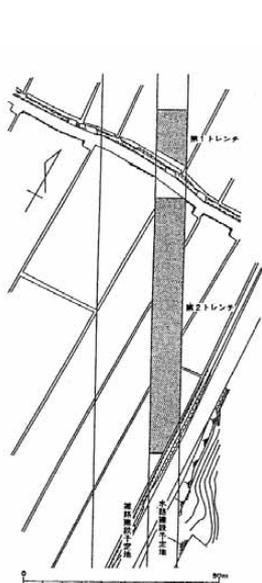
1) 古墳時代中期の竪穴式住居跡を2基検出した(S H01・03)。このうち一基には竈が設けられていた(S H01)。竈の事例としては古式のものであることがわかった。室橋遺跡において、古墳時代中期の遺構がみ



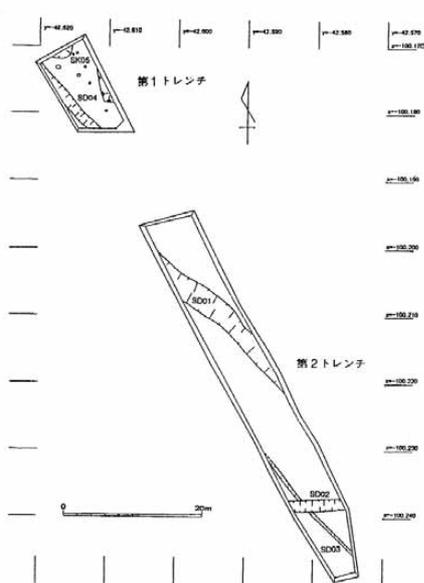
第1図 調査地および周辺の主要遺跡

つかったのは初めてのことである。室橋遺跡は、古墳時代以前から続く集落遺跡であることが明らかになった。

2) 平安時代初期に、南北に主軸をもつ大溝SD02が掘られていたことがわかった。この溝は、断面が「V」字形の深い溝で、平安時代後半に埋没したものと考えられ、屋敷地や集落の境界に



第2図 野条遺跡  
トレンチ配置図

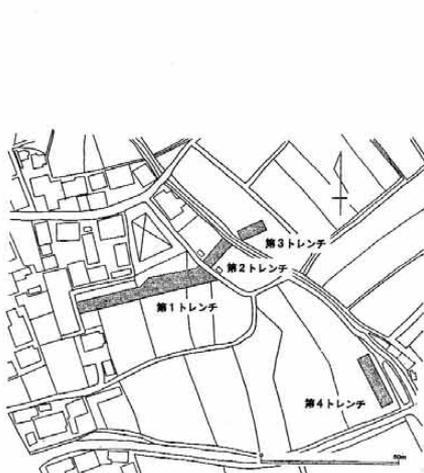


第3図 野条遺跡検出遺構平面図

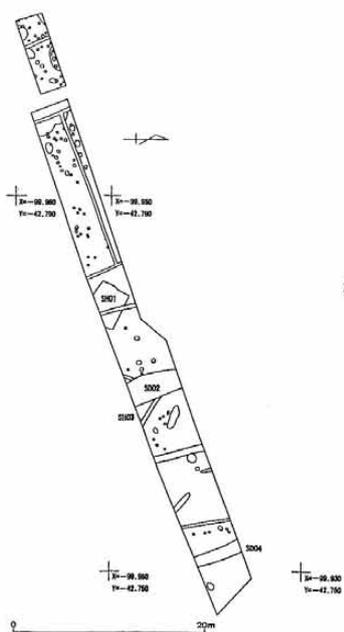
設けられた空堀の区画溝である可能性がある。溝の中から多数の土器類が出土していることから、近辺に平安時代の集落が形成されていたと推測できる。

3) 調査地西端で、掘立柱建物跡の柱穴群が分布することを確認した。この地点より西側に中世から近世にかけて営まれた集落が存在した可能性がでてきた。室橋遺跡の範囲を知る上で重要な事例である。

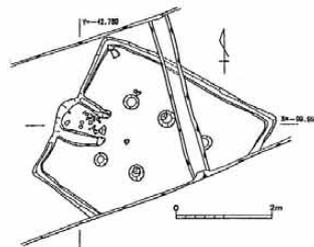
(田代 弘)



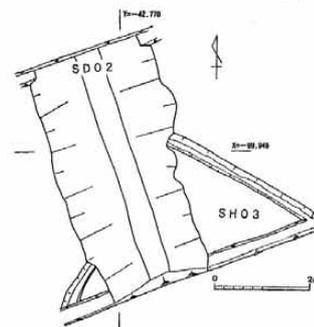
第4図 室橋遺跡トレンチ配置図



第5図 室橋遺跡検出遺構平面図



第6図 室橋遺跡竪穴式住居SH01実測図



第7図 室橋遺跡溝SD02  
・竪穴式住居SH03実測図

### 3 . ながおかきょう しまかいじんじ 長岡京跡右京第870次・下海印寺遺跡

所在地 長岡京市下海印寺尾流13-1ほか  
調査期間 平成18年4月24日～9月8日  
調査面積 970㎡

はじめに この調査は平成15年度から開始した京都第二外環状道路の建設に係る事前調査である。調査地は、長岡京右京七条四坊および西四坊大路が想定され、縄文時代から中世にいたる集落遺跡として知られる下海印寺遺跡の範囲にも含まれている。

調査概要 調査は2か所のトレンチを設定し、実施した。調査の結果、中世以降と考えられる井戸、中世の水田跡・旧小泉川の護岸工事跡・旧河道跡や、平安時代以降の礫敷状遺構・溝、弥生～古墳時代にかけての溝などを検出した。

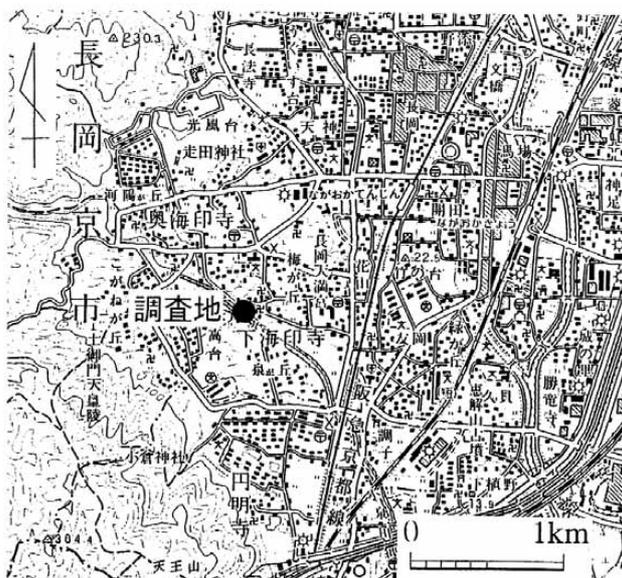
#### (1)第5トレンチ

尾流地区の西端、昨年度の第2トレンチに接して設けた調査区である。溝S D48～50の3条の並行する溝を検出した。溝S D48は幅2.5～3.0mで17mにわたって検出し、瓦器椀や土師器皿などが出土した。溝S D49は幅0.8mで8.2mにわたって検出し、土師器片が出土した。溝S D50は幅0.4mで7.6mにわたって検出したが、出土遺物はなく時期は不明である。

#### (2)第6トレンチ

尾流地区の東端、昨年度の第4トレンチに接した調査区である。北半部と南半部で2段になる水田地形を呈している。北半部では、礫敷状遺構S X51、護岸施設S X55、溝S D25を検出し、南半部では、井戸S E54、旧河道N R56-A・56-Bなどを検出した。

溝S D25は、昨年度の調査で一部を検出した遺構で、幅約5mを測り古墳時代の移動式カマドや土師器高杯・須恵器杯などが出土した。南北溝S D02は平成16年度の長岡京跡右京第842次調査および平成17年度の右京第862次調査で検出した溝で、奈良～平安時代の土師器皿、須恵器杯などが出土した。さらに東西方向の溝群も、平成17年度の右京第862次調査で検出した溝の延長部にあたり、溝S D06からは土師器皿、須恵器杯、溝S D25からは土師器皿、瓦器椀などが出土した。これらの溝は、平安時代末から中世にかけて埋まったと考えられる。



礫敷状遺構S X51は、調査地の北東端で 第1図 調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西南部)



第2図 尾流地区第6トレンチ(南東から)



第3図 礫敷状遺構 S X 51・護岸施設 S X 55(南から)

検出した。礫敷の幅は2.4～3.2mで、南西から北東方向に長さ約12mにわたってのびる。厚さ約10cmで、下層は砂と小礫、上層は拳大から人頭大の礫を敷き詰め粘質土で覆っていた。礫の間から削り出し高台の無釉陶器や土師器の碎片が出土したが、造営時期については明らかでない。溝 S D 64は礫敷状遺構 S X 51に並行して5 mにわたって

検出した幅0.5～1.3m、深さ0.2～0.3 mの溝である。須恵器の杯や土師器が出土した。護岸施設 S X 55は礫敷状遺構 S X 51の東側で検出した。人頭大の石を粘土とともに積み上げており、瓦器椀、三脚羽釜の脚部や、鍋が出土している。また、護岸の南側では、中世段階の旧河道 N R 56- B がわずかに残っており、堆積層上面から青磁椀、堆積土中から瓦器椀・瓦質の羽釜などが出土した。旧河道 N R 56- A は、調査

地の南半部で検出した拳大から人頭大の砂礫や砂質土によって埋まった旧河道で、少量の瓦片や陶磁器片を含んでいたことから近世以降に埋まったと考えられる。この河道以西ではより古い時代に堆積したと考えられる砂礫の上面に粘質土層が平面をなし、牛や人の足跡が洪水による砂礫によって埋まっていた。この層には、瓦器椀片などが入っていることから中世の段階にはこの場所が水田化されていたと考えられる。井戸 S E 54は石組みで、直径約1.5m、深さ0.8mを測る。掘形は、直径約2.0mの円形を呈し、底に一辺1.2mの方形に杭が隙間なく打ち込まれ、その内側に丸太を井桁に組んでいる。石組みは三段が遺存していた。中世時期の水田跡の上面から掘り込まれていることから、それ以降のものと考えられる。

まとめ 今回の調査結果を簡単にまとめると以下のとおりである。

- (1) 検出した遺構では溝 S D 25が最も古い時代のもので、溝の埋まった最終段階の埋土から古墳時代の須恵器や土師器が出土した。
- (2) 南北溝 S D 02や礫敷状遺構 S X 51からは、平安時代の土師器皿や無釉陶器などが出土しており、瓦器椀などの中世遺物を含まないことから中世以前の遺構と考えられる。
- (3) 長岡京期の遺構は確認することが出来なかった。

(戸原和人)

## 4. 美濃山遺跡

所在地 八幡市内里柿谷16 - 1 橋  
 調査期間 平成18年6月1日～8月18日  
 調査面積 1,200m<sup>2</sup>

はじめに この調査は、京都府立南八幡高等学校の敷地内での学校関連施設の新設に伴い、京都府教育庁管理課の依頼を受けて実施した。

美濃山遺跡は、弥生時代後期から奈良時代にかけての複合遺跡である。昭和57年1月から7月に府立南八幡高等学校の新設に伴い、当調査研究センターが発掘調査を実施した。この調査では、横穴8基や方形周溝遺構・土坑・柱穴群・溝などが検出され、弥生土器・土師器・須恵器・埴輪などが出土している。このうち横穴は 京都府指定史跡(狐谷横穴群)として校内に保存されている。

今回の調査対象地は、運動場北端のテニスコート・バレーコートとして使用されている場所である。この場所に2か所のトレンチを設定し調査を実施した。

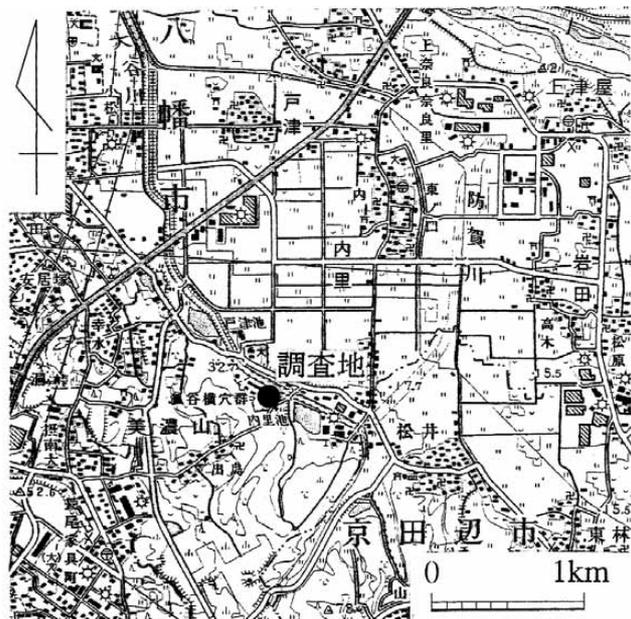
調査概要 今回調査を実施した場所は、前回に調査がほとんど行われていない丘陵先端部および丘陵裾部にあたる。600m<sup>2</sup>のトレンチを2か所設定して調査を行った。2か所のトレンチともに、学校建設に伴う造成工事により4m前後の盛土があり、壁面の崩落を防ぐため二段掘りにしたため、旧地形より下層で調査を行った面積は狭いものとなった。

第1トレンチでは、丘陵先端部分の大阪層群と考えられる黄褐色砂質土層を確認した。この砂質土の上に青灰色系の砂質土・粘質土が堆積し、粘質土中には、奈良時代末期から平安時代初頭の須恵器や江戸時代(17・18世紀頃)の土師器皿・陶器片が含まれていた。遺構としては、江戸時代の堆積層を掘り込んだ耕作に関連する溝群を検出した。

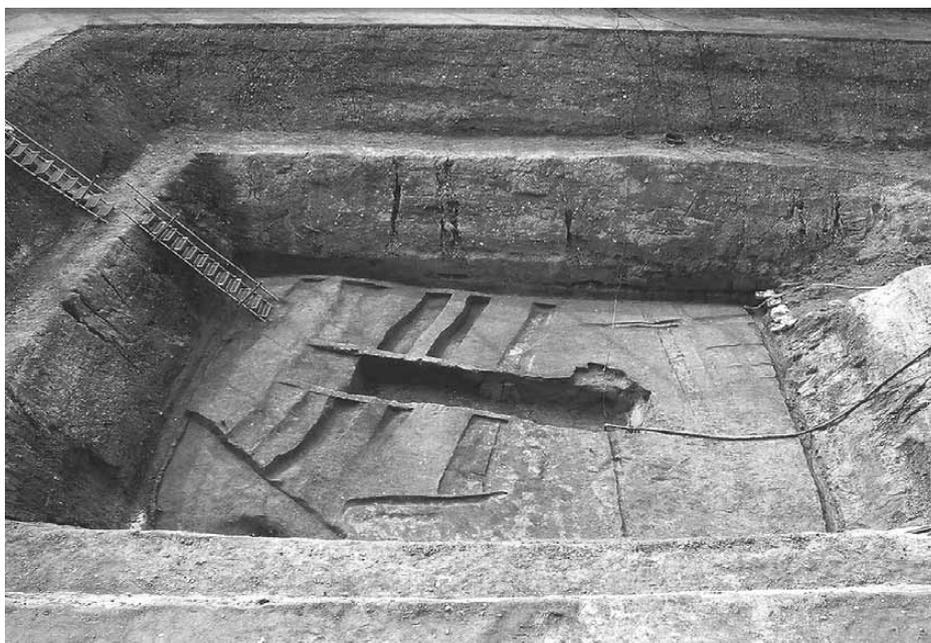
第2トレンチでは、丘陵先端部は確認できず、旧耕作土の下層は青灰色系の砂質土・粘質土・砂層が堆積していた。この堆積層から第1トレンチ同様に江戸時代の陶器片が出土し、堆積層を掘り込んで耕作に関連する溝群を検出した。溝群はその方位から3時期あることが確認できた。

まとめ 学校建設以前の地形図に今回の

調査地点を当てはめると、第1トレンチが



第1図 調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西南部)



第2図 第1トレンチ全景(東から)



第3図 第2トレンチ全景(東から)

丘陵先端部の畑または竹林と谷水田にかかる地域で、南西から北東方向に下がる丘陵先端部と水田の境界を検出したことになる。水田部分では、奈良時代末期から平安時代初期の須恵器、江戸時代の陶器などを含む砂質土・粘質土が厚く堆積して、堆積層を掘り込んだ耕作に関連する溝群を検出したが、狐谷横穴群や集落に関連するような顕著な遺構は確認できなかった。

(石尾政信)

## 107. 遠<sup>えん</sup>處<sup>じょ</sup>遺跡

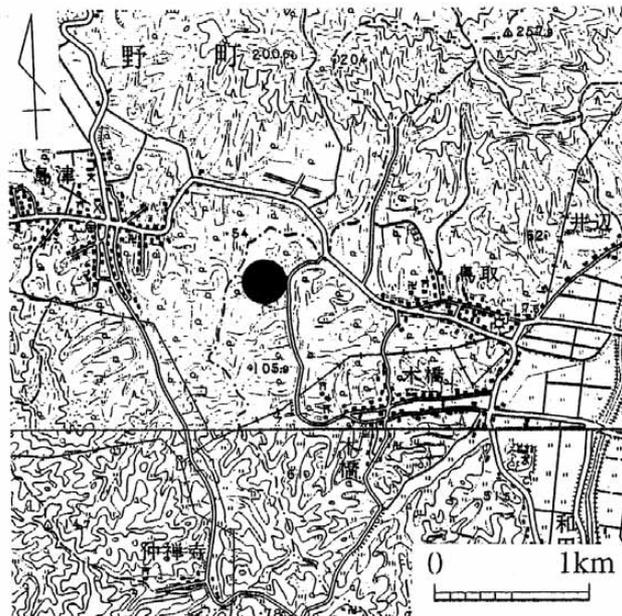
京丹後市弥栄町鳥取・木橋ほかに所在する遠處遺跡は、古墳時代後期から奈良時代後半(6世紀後半～8世紀後半)にかけての製鉄炉や炭窯、工房跡が確認された複合遺跡である。特に奈良時代における製鉄から精錬・加工までの、一貫した「生産工場」があったことがわかる貴重な遺跡である。

この遺跡は、旧弥栄町と旧網野町との境にあり、丘陵の尾根に階段状に立地している。遺跡の範囲は、約47ヘクタールにも及ぶ。遺跡からは、製鉄炉や炭窯、工房とみられる竪穴式住居跡や掘立柱建物跡などが確認されている。

遠處遺跡は、鉄生産の始まりを考える上で重要な資料となる生産遺跡で、わが国最大級の古代製鉄の一大生産地であったと考えられている。また、隣接して24基の古墳で構成される遠所古墳群(5世紀末～6世紀後半)や、古墳時代中期(5世紀中頃)に築造された、やや不整な方墳で、墳丘の裾に円筒埴輪列、墳頂部に形象埴輪(船形埴輪、椅子形埴輪など)をもつニゴレ古墳が所在する。

遠處遺跡の発掘調査は、丹後国営農地開発事業に伴い昭和62年度から平成4年度まで実施された。

この発掘調査の結果、製鉄炉・鍛



第1図 位置図(国土地理院1/50,000網野・宮津)



第2図 遠處遺跡の工房跡全景



第3図 「田租」木簡



第4図 現地の遺跡案内板

冶炉、登窯構造の炭窯・横口をもつ炭窯・土坑状炭窯、掘立柱建物跡、竪穴式住居跡など多数の製鉄関連遺構が発見され、大規模な古代製鉄工房跡であることが確認された。

検出された8基の製鉄炉は、古墳時代後期(6世紀後半)のものと、奈良時代後半(8世紀後半)のものとの2時期に分かれる。このうち奈良時代後半の製鉄炉から出土した鉄滓を化学分析した結果、砂鉄を原料とし、製鉄 精錬鍛冶 鍛錬鍛冶 製品まで、一貫した生産体制が確立していたことが判明した。出土した遺物には、数トンにも及ぶ鉄滓をはじめ、多量の炭、多量の土器・木製品などがある。

遠處遺跡の2時期に分かれる製鉄遺構で生産された鉄製品の供給先については不明である。しかしながら、遠處遺跡で生産された鉄製品については、丹後地域だけではなく、より広域的な供給先も視野に入れる必要がある。

また、奈良時代後半においては、工房内から「田租」と書かれた律令政府が管理する田租の支出を命じた木簡が出土しており、丹後国府あるいは国家直轄の官営工房であったことがうかがえる。

遠處遺跡は、一部分が保存され、府史跡に指定されている。見学するにあたっては、北近畿タンゴ鉄道網野駅から弥栄方面行きの丹海バスに乗り換え、バス停「あじわいの郷」で下車。そこから徒歩約13分。現地に遺跡案内の説明版が立てられている。遺跡の南東側には、「丹後あじわいの郷」がある。

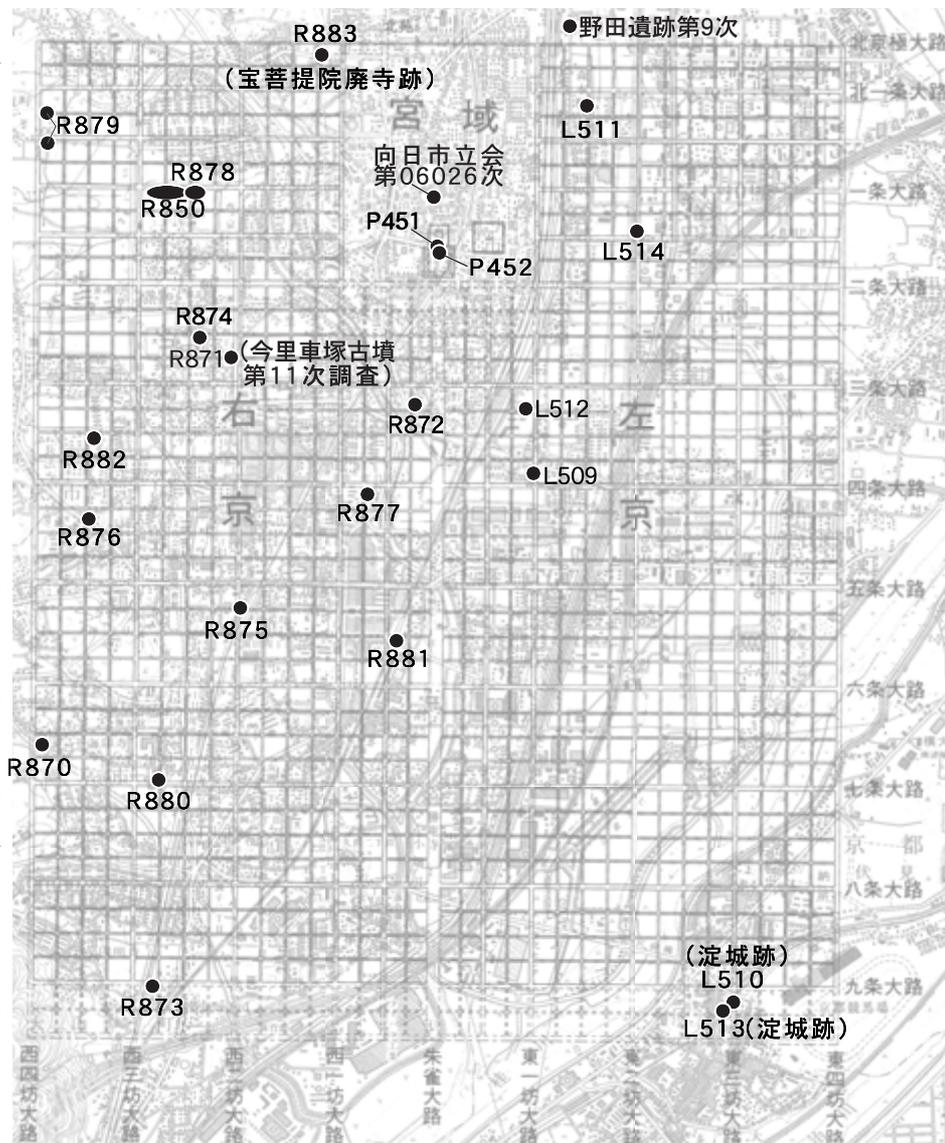
(村田和弘)

毎月1回、長岡京域で調査に携わっている機関が集まって長岡京連絡協議会を実施している。平成18年5月～8月の例会では、合計27件について報告があった。以下、報告内容の概略および、顕著な調査事例について紹介しておきたい。

右京第850・878次調査((財)京都市埋蔵文化財研究所調査)

京域の西北部、大原野地区において、東西向きの道路新設にともない、長さ約600mにわたり長岡京を横断する大規模な調査が実施された。調査は継続中であるが、これまでに検出された遺構は多様な内容を示し、縄文時代から中世にかけて長期にわたるが、時期的には古墳時代と長岡京期に分布の山がある。

古墳時代には、周囲に濠をめぐる集落が形成される。5世紀末に竈をもつ竪穴式住居数基で構成される小単位が、空地を挟んで複数出現し、そのグループ関係を維持したまま6世紀の後半頃にクワを嚙矢として掘立柱建物を取り入れ、7世紀初頭の集落自体が廃絶する前段階では、すべての住居が掘立柱の側柱建物に置き換わっている。また、調査区の



調査地位置図

ほぼ中央に、掘 (向日市文化財調査事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図に加筆) 調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数次は次数を示す。

調査地一覧表

	調査回数	条坊位置	調査概要
宮域	451次	朝堂院閤門	大極殿院回廊(閤門)位置で近世の石敷き遺構を検出。
	452次	朝堂院前庭	近世の「ぼうず池」の北岸を確認。埋土中に凝灰岩地覆石片や瓦が多く混入。
	向日市立合第06026次	第1次内裏	大極殿院の北面回廊から約170m北の地点で、一辺約1.5mの大型掘立柱穴が1基検出。2次利用時に多量の長岡京期の土器・瓦類が投棄され、第1次内裏の主要殿舎の存在を示唆する初例となった。
左京域	509次	四条一坊十三町	弥生時代後期の幅2m以上の自然流路を検出。
	510次	九条三坊十三町・淀城跡	淀城(1623年築城)の東曲輪推定地で、胴木を伴う石垣と江戸時代の敷地境界の石列・石護岸溝を検出。
	511次	一条二坊九町	弥生～古墳時代の土器を出土する流路2条・柱穴、長岡京東二坊坊間小路に関連する溝を検出。
	512次	四坊一条十六町	古墳時代前期以降の区画水田に伴う畦畔を2条と、ヒトや動物の足印が検出。
	513次	九条三坊十三町・淀城跡	淀築城以前の京街道路面に沿って縁石列、瓦列(雨落溝)、柱列を検出。
	514次	二条二坊十三・十四町	弥生中期前葉の土坑を確認。鶏冠井遺跡に関連するものとみられる。
右京域	850次	二条三坊九・十六町	古墳時代後期の竪穴式住居跡から掘立柱建物跡に推移する集落跡と、長岡京期の条坊側溝、町内宅地を検出。
	870次	七条四坊十四町	尾流地区の調査。旧小泉川の北岸で古墳時代の溝、平安時代以降の礫敷、近世の石組井戸を検出。
	871次	三条三坊四町	今里車塚古墳の後円部西側の墳丘裾および周濠を検出。木製樹物と墳丘盛土・葺石の施工方法が判明。
	872次	四条一坊一町・八町	14世紀に最終的に埋まった流路を確認。
	873次	九条三坊十三町	奈良時代中期の大甕を破碎して一括投棄した特殊土坑群を検出。
	874次	三条三坊六町	奈良～長岡京期の溝1条、中世乙訓寺の改変に伴う柱穴状・すり鉢状土坑を検出。
	875次	六条二坊十六町	長岡京期の大型掘形をもつ掘立柱建物跡・柵、開田城跡の石組井戸を検出。
	876次	五条四坊二町	顕著な遺構・遺物なし。
	877次	五条一坊九町・十六町	調査地南側の湿地北岸付近で、柱穴・溝を検出。
	878次	二条三坊八・九町	一条大路南側溝および併行する築地跡(添柱・内溝)、竊据付痕跡をもつ掘立柱建物跡を検出。
	879次	一条四坊十四町	古墳時代の土坑、長岡京期の掘立柱建物跡、中世後期の建物跡、江戸時代の井戸・建物・溝・石組土坑を検出。
	880次	七条三坊十三町	顕著な遺構・遺物なし。
	881次	六条一坊五町	弥生時代の溝・土坑、長岡京期の溝・柱穴、中世前期の土坑、江戸時代の柵・井戸・土坑を検出。
	882次	四条四坊六町	弥生時代の土坑、長岡京期の掘立柱建物跡・溝、中世の溝を検出。
	883次	北一条二坊一町	宝菩提院廃寺内において、中世までさかのぼる「方杖池」を調査。廃棄時の埋土に古代の遺物が混じる。
京域外	野田遺跡第9次		古代の河道または窪地状遺構、近代の湛水・暗渠水路組合施設を検出。
	中海道遺跡第65次		弥生時代後期の竪穴式住居跡・土坑・土器溜り・流路、近世以降の溝・土坑を検出。
	中海道遺跡第66次		

旧条坊呼称による。

立柱建物が「コ」字形に配された有力者の居館を連想させる部分が認められる。

その後、断絶期を経て長岡京期に入り、条坊が整備され宅地が形成されるなど、再び当地は活況を呈する。条坊関連遺構としては、一条大路の南側溝が地形の起伏に規制されることなく調査区のほぼ全域を貫通し、これと直交する西三坊大路および西三坊坊間小路の坊路を想定できる成果が確認された。また、町内部の土地利用については、その北辺部の情報に限られるものの、大路に面して築地(心柱または添柱と内溝)を設け(一・九・八町)、掘立柱による建物や柵、木組み井戸等が方位に揃って整然と配される。特に、八町と九町では、それぞれ1町四方の宅地のほぼ中央に、屋舎内に大甕を格子状に据えた痕跡を残す庇付きの建物が位置する。古代の都城において、一条大路周辺は高級宅地が集中する場所であり、長岡京においても、その西北部が短い造営期間の中で確実に宅地利用されていたようすが明らかとなった。

(伊賀高弘)

## 「第105回埋蔵文化財セミナー」

本年8月26日(土)に、「第105回埋蔵文化財セミナー」を、向日市民会館で開催した。毎年、夏のセミナーは、同時期に開催する「小さな展覧会」の展示内容に合わせて、府内の最近の発掘調査の成果などを紹介することを主眼に行っている。

今回の第105回埋蔵文化財セミナーは、『平成16・17年度京都市内発掘調査成果から』と題して、当調査研究センターの柴暁彦主査調査員から「京田辺市薪遺跡の調査」、同筒井崇史調査員から「木津町内田山古墳群の調査」についての報告を行った。また、昨年度、国史跡に指定された「大山崎瓦窯跡」の調査成果について、大山崎町教育委員会生涯学習室課長補佐林亨氏から報告していただいた。

以下、今回セミナーの誌上紹介を兼ねて、各報告者の発表内容の要旨を記述しておきたい。なお、当日は110名の方々の参加があった。また、セミナー終了後、「小さな展覧会」会場の向日市文化資料館に移動し、各報告者から展示遺物を前にしてのより詳しい紹介が行われ、好評の内に終了した。



セミナー会場風景

「京田辺市<sup>たきぎ</sup>薪遺跡の調査」 当調査研究センター主査調査員 柴暁彦

はじめに 薪遺跡は、京都府南部に広がる山城盆地のほぼ中央、木津川左岸の京田辺市薪に所在する。遺跡は京田辺市の中央部やや北寄りに位置し、西側を木津川の支流である手原川、東側を天津神川、南側を生駒山系から連なる天理山丘陵によって囲まれた扇状地上に立地している。遺跡の範囲は東西約950m、南北約900mの広範囲におよんでいる。

薪遺跡では、これまで8次にわたる発掘調査が行われている。第1・2次調査は、京田辺市教育委員会が実施されたもので、第3～8次調査は道路建設に先立って、当調査研究センターが平成13年度から実施している。この一連の調査によって、これまで古墳時代後期以降に営まれた集落跡と考えられてきた薪遺跡が縄文時代にまで遡ることが明らかになるなど大きな成果を得ることができた。この中で今回は調査で明らかとなってきた薪遺跡



講演風景：柴暁彦

の縄文時代中期後半と同後期前半のようすを紹介したい。

調査の概要 今回報告する薪遺跡の発掘調査は、平成13年度から対象地内での試掘調査を3か年にわたって実施し(第3～5次調査)、その成果にもとづいて平成16年度から本格的な調査(16年度：第6次調査、17年度：第7次調査、18年度：第8次調査)を進めている。

最初に行った平成13年度の試掘調査(第3次)では、縄文時代中期後半の土坑や配石遺構などが確認され、この試掘地点を中心に約750㎡の広範囲の調査を実施した平成16年度の調査(第6次)では、同時代の竪穴式住居跡2基をはじめ、多数の土坑などを検出した。また平成17年度には、16年度調査地の南側隣接地で約1,200㎡の調査を行い(第7次調査A地区)、同時代の土坑群(10基)を検出するなど、一帯に広がる縄文時代中期の遺構群の広がりを確認した。

一方、平成17年度の調査では、上記の縄文時代中期後半の遺構群検出地点(A地区)から約250m北西に位置する調査地点(C地区)でも縄文時代後期前半の土坑や土器や石器などが出土する流路跡が見つかり、この流路跡の堆積土中から石棒が出土した。この地区では竪穴式住居跡などは確認できなかったものの、近隣に縄文時代後期前半のムラが存在したことは間違いないものと判断している。

縄文時代中期後半のようす 縄文時代中期後半の遺構としては、第6次調査地の北半部で一辺約5mを測る隅丸方形の竪穴式住居跡S H68を検出するとともにその南側で土坑を13基検出した。またこの南側に隣接する第7次調査A地区では10基の土坑を検出した。土坑は、平面形が円形もしくは楕円形で、規模は直径1.3m前後、深さ0.7m前後を測る。両調査地での出土遺物の量から、この周辺に竪穴式住居跡数基程度による小規模な集落が営まれていたと考えられる。

縄文時代後期前半のようす 縄文時代中期後半の竪穴式住居跡などを確認した場所から北西に約250m離れた調査地(第7次調査C地区)で、縄文時代後期前半の土坑1基と自然流路(川跡)を確認し、この堆積土中から安山岩製の大型石棒の頭部片が出土した。もともとはムラの広場に立てられて、精神活動の一端としてマツリなどに利用されたが、その役割を終えて川へ捨てられたものと判断される。



薪遺跡出土の石棒

石棒は、頭部が2段に作り出され身部はわずかに下部へ行くほど太くなる様相を示す。大きさは頭部の直径が18.8cm、身部が17cmを測る大型品で、長さ30.8cmが遺存している。管見では、石棒は近畿地方では10例の報告があり、当遺跡が11例目となる。その中で当遺跡と同様に頭部が2段に作りだされたものは、兵庫県城崎郡竹野町の<sup>みくらおか</sup>見蔵岡遺跡、奈良県天理市の<sup>ふる</sup>布留遺跡、京都府綾部市の<sup>くずれやま</sup>崩山神社に奉納された石棒が知られる。

薪遺跡の縄文時代後期前半のようすとして

は、竪穴式住居跡などが未確認ではあるが、C地区の南端で石棒が出土した流路跡が見つかったこと、その北側から同時代の土坑を検出していることなどから、C地区の北側一帯にこの時期のムラが広がっていると推測している。

まとめ 平成16・17年度の調査を通して、薪遺跡では縄文時代中期後半並びに後期前半(4500～3500年前)のムラが営まれていたことが明らかになった。

第6次調査地から第7次調査のA地区にわたる範囲では、縄文時代中期後半の遺構(竪穴式住居跡・土坑群)を検出するとともに、多くの土器や石器類が出土した。これは南山城地域では初めての事例である。

一方、第7次調査のC地区では、大型の石棒をもつムラの一端が確認された。おそらく隣接する場所に後期前半のムラの本体が眠っていると考えている。

このように山城盆地における遺構の検出をともなった縄文時代の発掘調査例はまだ少ない。縄文人の生活の跡を直接うかがうことのできる調査成果は今後、当時の生活のようすや文化の伝播などを考えるうえで極めて重要な資料になると思われる。

#### 「木津町内田山古墳群の調査」 当調査研究センター調査員 筒井崇史

調査の概要 内田山古墳群は、京都府南部に位置する相楽郡木津町に所在する古墳群である。調査地はJR木津駅の東側の丘陵先端に位置する。調査は、平成11年度から開始し、平成12・14～17年度の各年度に継続して調査を実施した。今回の埋文セミナーでは、平成16年度に実施した内田山B1号墳の調査と、平成17年度に実施した内田山B2号墳の調査を中心に報告したい。

内田山古墳群は、調査地の北約200mにある京都府立木津高等学校の敷地内で確認されているA支群と、今回の調査地のB支群とに分かれている。両者の間には小さな谷地形が入り込んでおり、区別される。内田山古墳群B支群における古墳の総数は不明で、平成18年9月末現在8基が確認されている

平成16年度の調査 平成16年度に調査を実施したB1号墳は、北西に向かったのびる尾根の頂部に築かれた一辺17.5mの方墳で、立地や出土遺物から、B支群でも最初に築かれたと考えられる。B1号墳の墳丘上では埋葬施設を4基確認した。このうち埋葬施設SX01・SX02は、平成11年度の調査で確認しており、SX01は埴輪棺、SX02は普通の円筒埴輪を利用した埴輪棺であった。平成16年度の調査では新たに埋葬施設SX153・SX154を検出した。両埋葬施設はどちらも木棺直葬であった。

SX153は、全長3.3m、幅0.6mの組み合わせ式木棺を納めていた。木棺は、側板が両小口板をはさみ込む形態である。棺内に仕切



講演風景：筒井崇史



内田山 B 1 号墳埋葬施設 3 (南東から)

り板はなく、礫を敷きつめて礫床としていた。棺の底板は存在しなかったと考えられる。礫床の北東寄りには蓋形埴輪の立ち飾りや飾り板受部を折り重ねて、被葬者の枕としていた。副葬品は、枕の北東側から刀子 1 点が出土したにとどまる。

S X 154 は、南端が削平されていたため、正確な規模は不明であるが、全長 2.5m、幅 0.5m の木棺を納めていた。木棺は、組み合わせ式木棺で、北側の小口板が木棺の幅より

も広い形状をとる。南側の小口板の状況は不明瞭である。棺内には、北寄りに仕切り板が存在し、大きく 2 つの空間に分けられる。北寄りの空間は副室的な空間で、南寄りの空間は被葬者を埋葬した主室である。主室の北東寄りには高杯の杯部が置かれており、被葬者の枕に転用していたと考えられる。副葬品は、主室の中央から六獣形鏡 1 面が鏡面を上にして出土したのみである。また、B 1 号墳の周溝からは多数の埴輪が出土した。出土した埴輪には、円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪・盾形埴輪・家形埴輪などがある。しかし、その大半は細片となっており、全体の形状を知ることができる資料はあまりない。古墳の築造時期は、出土した埴輪から古墳時代中期前半の築造と考えられる。

平成 17 年度の調査 平成 16 年度調査地北側の丘陵平坦部に調査区を設定して実施した。調査の結果、新たに古墳 3 基 (内田山 B 2 ~ 4 号墳) のほか、弥生時代後期の竪穴式住居跡なども検出した。このうち、内田山 B 3・B 4 号墳は周溝の一部を検出したにとどまるが、内田山 B 2 号墳は墳丘全体の調査を行った。B 2 号墳は一辺約 12m の方墳で、埋葬施設 1 基 (S X 12) を確認した。

S X 12 は、全長 5.0m、幅 0.65m の木棺を納めていた。木棺は、組み合わせ式木棺で、両側の小口板が木棺の幅よりも広い。内部は 3 枚の仕切り板によって 4 つの空間に分割され、中央の 2 空間が埋葬主室、両側の空間が副室と考えられる。埋葬主室には、小さな川原石を敷きつめて礫床としていた。また、2 空間で、合わせて 3 か所の枕石が置かれていたので被葬者は 3 人と考えられる。副葬品は東側の主室から小型の内行花文鏡 1 面や豎櫛数点のほか、滑石製の玉類が 1,000 点以上出土した。玉の種類は勾玉・管玉・棗玉・白玉などがある。また、B 1 ~ 4 号墳の周溝から



内田山 B 1 号墳出土の六獣形鏡

も多数の埴輪が出土している。

まとめ 内田山古墳群(B支群)は、平成16・17年度の調査の結果、古墳時代中期前半を中心とする時期に築造された古墳群であることが明らかになった。その特徴としては、一辺12～18m前後の小規模な方墳からなること、埋葬施設に礫床や枕を設けること、多数の埴輪を伴うことなどがあげられる。このうち、埋葬施設に礫床や枕を設けることは、日本海側の山陰地方から北近畿地方にかけて多



内田山B 2号墳埋葬施設(東から)

くみられる特色である。さらに南山城地域でも同様の特色をもつ古墳がいくつか見つかったが、複数の古墳でこうした特色がみられるのは内田山古墳群B支群に限られる。こうした点や、木津町域が北近畿地方や山陰地方などの日本海側地域と大和地域とを結ぶ交通の要衝の地であることをふまえると、内田山古墳群の被葬者がこれらの地域との間に何らかのつながりがあった可能性を示しており注目される。

一方、多数の埴輪が出土している点は、被葬者がこうした埴輪を入手することのできる立場にあったと考えられ、畿内の大王政権とも密接に関わっていたことを示している。

おおやまざきかわらがまあと  
「大山崎瓦窯跡の調査」 大山崎町教育委員会生涯学習室課長補佐 林亨氏

見つかった遺構と遺物 検出した古代の遺構は瓦を焼いた平窯6基、溝4本、土坑・ピット多数である。瓦窯は、調査地の南端で検出した窯を1号窯とし、北端で検出した窯を6号窯とした。南端で検出した1号窯は南に焚口をもつが、2号窯から6号窯は焚口を東にもち、ほぼ南北方向に連なっている。2～6号窯の間隔はほぼ等間隔に配置されている。また、焚口両側に瓦積み基壇を思わせるような瓦積が配されており当瓦窯の大きな特徴となっている。

出土遺物は、ほとんどが軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦などの瓦類で、遺物収納コンテナ600箱出土した。溝5および平窯の前庭部からの出土が大半で窯内部からの出土は少ない。また、窯操業停止後の堆積土中からの出土が多い。軒瓦の文様は、岸部瓦窯からやってきた文様、西賀茂瓦窯からやってきた文様、そして大山崎オリジナルの文様があることがわかった。このほかの遺物としては、須恵器蓋・杯、土師器皿・壺の出土があるが少量である。溝8から大半が出土した。



講演風景：林亨氏

どこに使うために焼いたのか 大山崎瓦窯



展覧会会場での説明風景

で生産された瓦は平安宮、平安京、嵯峨院、河陽離宮、広隆寺、大宅廃寺、長岡宮、招提中町遺跡などに供給され、諸建築の屋根を飾っていたと考えられる。これらの供給先のなかで時期的なことを考えると、やはり平安宮諸殿改修に伴う生産量が多かったものと考えられる。

時代は 瓦の文様の検討から岸部瓦窯より後、西賀茂に所在する上の庄田瓦窯より先であろうと考えられる。嵯峨天皇が大山崎に

度々行幸し河陽離宮を造営するのが弘仁年間(811～822年)であることを考え合わせると、大山崎瓦窯の創業時期がその頃に推定できる。当初、河陽離宮造営用の瓦を焼いた大山崎瓦窯は、平安宮の修理が本格化する中で窯の数を増やし、生産規模を拡大させていったものと考えられる。

当地に立地した理由 当地は古代において交通の要衝であった。その利便性と嵯峨天皇の河陽離宮造営に係わって瓦窯が築かれる事になったと考えられる。燃料の薪を他地域から運搬するのも水運を利用すれば大量に輸送できる。また、でき上がった瓦を平安宮内や嵯峨院に運搬するのも淀川、桂川、鴨川経由で運ぶことができる。当瓦窯から200m圏内に山崎津、陸路の山陽道がある訳だから非常に好立地と言える。

評価 6基の平窯が整然と並ぶ姿は、まさに官営瓦窯そのものである。さらに出土した軒瓦が平安宮の建物に使われていたことが確認できたことも驚きに値する。また、窯の構造、形態、寸法も計画的であり、岸部瓦窯や西賀茂瓦窯群との比較においても大差なく、国の関与、同一工人の関与も十分考えられる。

今回の調査以前、大山崎瓦窯の存在は全くわかっていなかった。その段階では平安宮で出土する平安時代前期の瓦の多くは、平安京北方の西賀茂瓦窯群および摂津の岸部瓦窯で生産され、それぞれの施設に供給されたと考えられていた。それが今回の発見によって、2地域だけからの供給ではなく、大山崎瓦窯を含む3か所からの供給体制であったことがわかった。それは今日まで考えられていた平安宮への瓦供給の考え方を大きく変えるものであるといえる。今回の調査成果によって古代都市大山崎の姿がまた一つ明らかになった。

備考：本稿は、各発表者の報告要旨と「第105回埋蔵文化財セミナー」での配布資料をもとに、編集部でまとめたものです。

## 「第22回小さな展覧会」

当調査研究センターでは、府民の方々に埋蔵文化財に対する関心と文化財保護への理解を深めていただくことを目的に、毎年夏期に「小さな展覧会」と題する事業名で、前年度に京都府内の発掘調査で話題になった遺跡や出土遺物を紹介する速報展を昭和57年度から行っており、今回で22回目を迎えた。

昨年度、当センターは設立25周年を迎え、記念事業として「小さな展覧会」に代わり、特別展「そして『王』になった。」を開催した。このため今回の展覧会では、平成16年度と17年度の2か年に府内で実施された主要な発掘調査をとりあげることにした。

開催期間は、平成18年8月19日(土)から同年9月3日(日)の延べ13日間で、当センターに隣接する向日市文化資料館を会場に実施した。

今回の展覧会では、当センターが調査を実施した15遺跡と府および市町教育委員会・関係機関が実施した13遺跡(合計28件)から出土した遺物約250点のほか、調査状況の写真パネルや地図・図面などを展示し、各遺跡の調査成果を紹介した。主な展示品としては、亀岡市池尻遺跡出土の古墳時代の子持勾玉、京田辺市新遺跡出土の縄文時代の石棒など、府内でも珍しい遺物のほか、長岡宮翔鸞楼跡、同内裏正殿跡、大山崎瓦窯跡など、全国的に話題となった調査の出土遺物を展示することができた。なお、当センターが本年7月まで調査を実施した南丹市の城谷口古墳群出土の蛇行剣を特別展示し、当日現地説明会に参加できなかった方からも好評を得た。また、展覧会の期間中に現地説明会を実施した亀岡市の蔵垣内遺跡・国分古墳群と宮津市の宮津城跡についても新聞記事や説明会の写真を掲示する速報コーナーを設けて紹介した。このほか、初めての試みとして、会場の一角にコンピュータを設置し、設立25周年記念事業で作成したCD版「京都タイムスリップ」を自由に閲覧していただいた。今回の展覧会に合わせて、8月26日(土)に「第105回埋蔵文化財セミナー」を開催した(詳細は本号に掲載)。

期間中は猛暑にもかかわらず、府内外から多数の入場者を得て、盛況のうちに終了することができた。最後になりましたが、今回の開催にあたり、展示品や会場、備品の借用にご理解とご協力をいただいた、関係機関および関係者の方々に御礼申し上げます。(辻本和美)



第22回小さな展覧会図録



展示会場



見学風景

## センターの動向(06.07～10)

1. できごと
7. 1 城谷口古墳群(南丹市)現地説明会
- 3 亀岡国営臨時職員人権研修
- 4 都出比呂志理事、城谷口古墳群、蔵垣内遺跡現地指導
- 6 南丹広域振興局長、城谷口古墳群視察
- 13 城谷口古墳群発掘調査終了(4.10～)  
野条遺跡第11次関係者説明会  
野条遺跡第11次(南丹市)発掘調査終了(5.18～)
- 20 平成18年度埋蔵文化財担当職員等講習会(於：名古屋市)森下衛調査第1課課長、石井清司調査第3係長参加  
亀岡市人権教育指導者研修会(於：亀岡市)安田正人総務課長、森正調査第2係長、岩松保主任調査員参加
- 24 河守北遺跡第5次(福知山市)発掘調査開始
- 26 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 26～8.9 埋蔵文化財担当者特別研修「文化財写真(応用)課程」(於：独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)田中彰主任調査員参加
- 28 野条遺跡第12次(南丹市)発掘調査開始
8. 2 禰宜田佳男文化庁調査官、蔵垣内遺跡視察
- 3 丹後教育局長、宮津城跡視察
- 8 平成18年度教育庁役付職員人権問題研修(於：京都市)中西和之常務理事・事務局長、長谷川達調査第2課長、水谷壽克調査第1課課長補佐兼企画係長、石井清司調査第3係長、杉江昌乃総務係長、中川和哉主任調査員参加
- 9 石野博信理事、蔵垣内遺跡現地指導
- 11 平成18年度第1回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主催者会議(於：向日市)長谷川達調査第2課長、小山雅人調査第2課総括調査員出席
- 17 時塚遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 18 美濃山遺跡(八幡市)発掘調査終了(6.19～)
- 19 「第22回小さな展覧会」開催(於：向日市文化資料館)(～9.3)  
蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群現地説明会
- 22 理事協議会(於：当センター)上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、中西和之常務理事・事務局長、石野博信、井上満郎、都出比呂志、中谷雅治、高橋誠一、上原真人、宮野文穂、小池久各理事出席、「第22回小さな展覧会」視察
- 23 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 24 平成18年度教育庁役付職員人権問

- 題研修 (於：京都市)安田正人総務課長、森下衛調査第1課長、小池寛調査第1係長、森正調査第2係長参加
- 25 平成18年度教育庁役付職員人権問題研修 (於：京都市)小山雅人調査第2課総括調査員、松井忠春・竹原一彦・田中彰主任調査員、今村正寿総務課主任参加
- 26 第105回埋蔵文化財セミナー(於：向日市民会館)
- 27 宮津城跡第13次現地説明会
- 28 長岡京跡右京第870次・下海印寺遺跡(長岡京市)関係者説明会
- 30 宮津城跡第13次発掘調査終了(6.5～)  
京丹後市史跡整備委員会(於：京丹後市)長谷川達調査第2課長出席
- 9.3 「第22回小さな展覧会」終了(8.19～)
- 6 室橋遺跡第4次(南丹市)関係者説明会
- 8 室橋遺跡第4次発掘調査終了(6.19～)  
長岡京跡右京第870次・下海印寺遺跡(長岡京市)発掘調査終了(4.20～)
- 11 室橋遺跡第5次発掘調査開始  
長岡京跡右京第890次・伊賀寺遺跡(長岡京市)発掘調査開始
- 14 上田理事長、蔵垣内遺跡現地視察
- 15 平成18年度教育庁役付職員人権問題研修 (於：京都市)森下衛調査第1課長、長谷川達調査第2課長、杉江昌乃総務係長、辻本和美資料係長、森正調査第2係長参加
- 16～17 京都府埋蔵文化財研究会(於：京都社会福祉会館)
- 21 亀岡市人権教育指導者研修会(於：亀岡市)水谷壽克調査第1課課長補佐兼企画係長参加
- 21～22 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於：北海道)長谷川達調査第2課長、今村正寿主任、鍋田幸世主事出席
- 22 野条遺跡第12次(南丹市)関係者説明会  
野条遺跡第12次発掘調査終了(7.28～)
- 23 内田山遺跡・内田山古墳群第7次(木津町)現地説明会
- 25 谷奥古墳群(京丹後市)発掘調査開始
- 26 蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群現地調査終了(4.10～)
- 27 長岡京連絡協議会(於：当センター)  
難波野遺跡第5次(宮津市)発掘調査開始
- 28 河守北遺跡第5次(福知山市)関係者説明会
- 10.2 長岡京跡右京第889次・井ノ内遺跡(長岡京市)発掘調査開始
- 3 三日市遺跡(亀岡市)発掘調査終了(5.8～)
- 13 平成18年度教育庁役付職員人権問題研修 (於：京都市)安田正人総務課長、小山雅人調査第2課総括調査員、水谷壽克調査第1課課長補佐兼企画係長、小池寛調査第1係長、石

井清司調査第3係長参加

- 17 俵野廃寺(京丹後市)発掘調査開始  
亀岡市人権教育指導者研修会  
(於：亀岡市)辻本和美資料係長参加
- 17~18 長岡第5小学校6年生、長岡京右  
京第890次現地見学
- 19 阿良須古墳群(福知山市)発掘調査  
開始
- 25 長岡京連絡協議会(於：当センタ  
ー)
- 27 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近  
畿ブロック埋文研修会(於：和歌山  
県)石井清司調査第3係長、増田孝  
彦・岩松保主任調査員参加

2. 普及啓発事業

- 8.26 第105回埋蔵文化財セミナー(於：  
向日市民会館)『平成16・17年度京  
都府内発掘調査成果から』：柴暁彦  
当調査研究センター主査調査員「京  
田辺市新遺跡の調査」、筒井崇史当  
調査研究センター調査員「木津町内  
田山古墳群の調査」、林亨大山崎町  
教育委員会生涯学習室課長補佐「大  
山崎瓦窯跡の調査」



城谷口古墳群現地説明会風景



蔵垣内遺跡第4次・国分古墳群  
現地説明会風景

#### 編集後記

情報101号をお届けします。本文でふれましたように、今号から特集記事として「遺跡でたどる京都の歴史」を掲載することになりました。京都の歴史を、遺跡や遺物、これまでの発掘調査の成果などを通して紹介して行く試みです。第1回目として本号では、「旧石器時代の京都」をとりあげました。今後、各時代を追って連載していく予定ですので、ご期待ください。

(編集担当 = 辻本和美)

### 京都府埋蔵文化財情報 第101号

平成18年11月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER